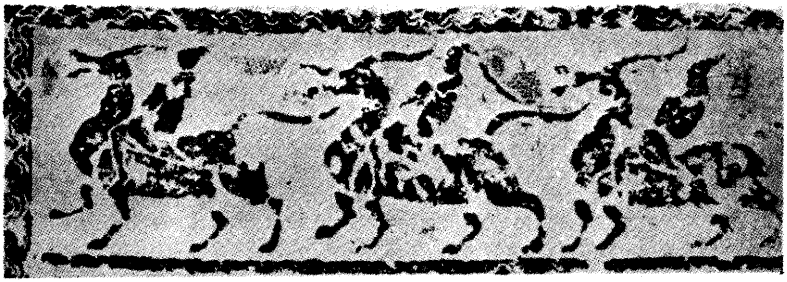
人文

第四八号



2001

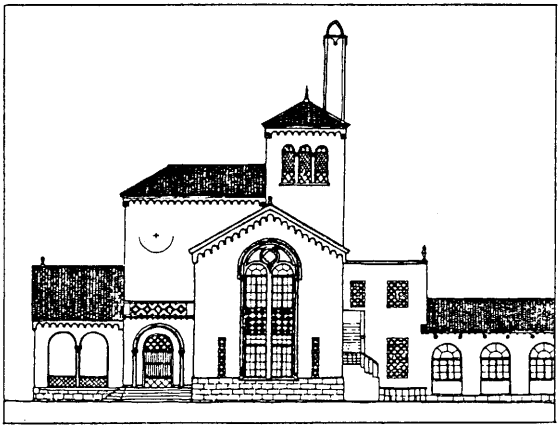
京都大学人文科学研究所

ISSN 0389－147X

人　文　第四八号

2000年1月―2000年12月

も　く　じ



随想

大部門化とセンターの改組……桑山正進

今考えていること……狭間直樹

洛北滞在記――京都大学に滞在しての思い出――……張啓雄

講演

夏期講座

「人種」は存在するか――文化人類学から語り直す――（竹沢）／西南中国の民族と言語――社会言語学の視点から――（池田）／「故郷でインドを想い眠る」――前近代におけるインドとイスラーム世界の人的交流――（真下）／インドのイスラーム教徒とカースト制度――身分の高い「民族」と低い「民族」の分類をめぐって――（小牧）……10

開所記念講演

簠簋の名物学（木島）／祭式と輪廻――古代インド再生説の展開――（藤井）／元曲「盆児鬼」考――しゃべるお碗の話――（金）……16

退官記念講演

小さな発見の喜び（吉川）／古代中国思想史における「真」字の思想史をめぐって――敗残兵の弁――（荒牧）……20

彙報

人文研の〝たからもの〟……田中峰雄……24

共同研究の話題

共同研究「帝国の研究」参加記……小山哲……33

南インドのヴェーダ写本研究班覚え書き……秋田茂……35

検索と出典さがし……井狩彌介……41

「図像学」の研究……船山徹……41

所のうち・そと

龍の尾は曲るか――大明宮含元殿遺址保存事業のこと――……大原嘉豊……41

戎肆庵読裘記序……田中淡……51

本当は内緒にしておきたい密かな楽しみ……浅原達郎……51

「世紀」と「センチュリー」……矢木毅……51

明治絵画の魅力……小林博行……51

東京国立博物館での史料整理……高階絵里加……51

伊勢神宮の異国認識……塚本博志……51

憧れ症候群――文字――……中西明……51

書いたもの一覧……幸子……51

大部門化とセンターの改組

桑山正進

三研究所が戦後ひとつの研究所の、日本部・東方部・西洋部として寄りあって半世紀。統合の熱気はいくらなんでもわからなくなる。研究所の運営形態や研究体制など将来をどうするといった想いに異見が出るのはここにきて当然で、一案の創出はなかなかにむずかしい。一昨年の末、それがまとまったについては山本さんや森さんほかの辛抱強い努力があったからである。

大部門化に期待したのは、ポスト増のほかに、実験講座増であったが、いまかいまかと待つうち秋になってしまった。独法化がらみか、予算枠組みの大変動が突如発表された。講座費の基準が下方修正されてしまい、講座増どころのはなしではなくなった。そしてその年のすえに四月から新しい体制になることがほぼ確定した。

「世界文化に関する人文科学の総合的研究」という研究所の目的は動かさず、一七小部門は五大部門に再編成、センターは拡充して漢字情報研究センターとなり、これら五部門一センターを二つの研究部にわけて運営する。文化をどうとらえるか

が大部門構成の鍵となった。時間の経横軸（タテヨコ）で観る文化生成研究部門と文化連関研究部門。あらたな文化研究はいかに創造しうるかといった課題は文化研究創成研究部門があたる。これらは人文学の理論や方法を特に扱う研究部であって人文学研究部と称する。

一方、文化の表れ方や要素を実証研究する文化表象研究部門と文化構成研究部門。これらは東洋学に特化し、東方学研究部と称する。漢字情報研究センターは、旧の事業を引き継ぎつつ、漢字システムを正統な中国学術伝統をふまえて構築することを主たる事業とし、ひいては漢字を媒介とする東洋学の国際ハブセンターを目指す。

菓子箱が格好よくても菓子がいい加減では商売にならない。研究という中身が充溢してきたから、外枠をそれにそって変えることになったのである。二五の共同研究の多くは毎週あるいは隔週開かれている。

地道ながら活発なうごきだ。一三が人文学研究部、一二が東方学研究部の研究班である。これらはみな所員個人の研究を基礎にしている。共同研究班を軸に今後も研究所は活動していく。最近の経済効率優先の環境のなかで、基礎研究はそれだからこそ、その充実が期待されているはずである。

今考えていること

狹間直樹

人間だれしも自分流にしかことがらを理解できぬことは、よく分かっているつもりでも、実際にとなると、なかなか難しい。

清末に日本に留学した学生が帰国したとき、故郷の農民から、外国には空があるのか、空には太陽があるのかと聞かれたという。太陽は天朝の皇帝としか結びつかないものだからである。ことはけっして農民だけの問題ではなく、範囲やレヴェルはちがっても、知識人とて自分の頭のなかに有ることしか理解できないのは本質的には同じことだった。

たとえばアメリカの“President”の制度は、皇帝が全統治権を総覧してきた中華世界においては、当然ながらたいへんに理解しにくいものであった。熊月之氏は、当初、単純に国家元首としての一面をとらえて、アメリカでは「皇帝を選挙する」、「皇帝は四年ごとに交代する」と、「皇帝」の訳語が用いられたことを指摘している。

もちろん、それが正確な訳とは考えられていなかったから、「伯理璽天徳（プレジデント）」などと音をあてたり、機能面からする、「総統

領」とか「首領」とかの訳語も用いられた。そして、ある訪欧使節団の随員の記述に、こういうものが見える。「アメリカは〝天下を公とする民主の国〟である。賢に伝えて子に伝えず、四年ごとに衆が一人を挙げて統領とし、〝伯理璽天徳〟と称している。」（張徳彝『航海述奇』走向世界叢書本、五五六頁；〔公〕は原文〔官〕、編者の訂正に従う）

これを書いたのは二十歳前の同文館の学生で、一八六六年のことである。この「民主」は、間接的にはデモクラシーにつながる背景をもつが、直接的には世襲の特権的な「君主」にたいするターム、平民のなかから挙げられた賢者の意味である。

ところで、中江兆民は“Du souverain”を「君」と訳した。（『民約訳解』巻之一第七章）これは、島田虔次氏がつとに指摘されたように、黄宗羲の「原君」に凝縮された儒教の君民関係理解、つまり「君」とは〝有徳有能な賢者〟の統治という意味をふまえた、選びぬかれた訳語なのであった。のちに「主権者」と訳されるこの「君」がプレシデントとしての「民主」と直結するものであることは、容易に見てとれよう。

兆民はここで、この「君」がいわゆる「君主」と誤解されないよう、異例の懇切な説明を施している。しかし日本でも中国でも、兆民のこの配慮にたいする反応は、管見のかぎりまだない。それが生きるのには、辛亥革命の失敗の原因を理念的に考えぬいた田桐（『共和原理　民約論』一九一四年）を待たねばならなかった。

これはきわめて鮮明な一例である。異文明の新概念を摂取するにあたっての、伝統文明との関わりの〝知層〟をさらに追求することにより、近代における東アジア〝文明〟圏の内実を探っていきたいと考えている。

右の一文は、狭間直樹教授の停年退官を記念して、二〇〇一年三月二三日に本研究所本館大会議室において開催された公開研究会における最終報告の要旨である。

洛北滞在記

――京都大学に滞在しての思い出――

張　啓　雄

小生は、一九八〇年代に、留学先として東京に約十年間ほど滞在しておりました。その間、京都の旅はいつも垂涎の的でした。しかし学生時代は旅に出ることがあまり容易でなかったので、京都の旅はいつも一週間以内に限られていました。二十年後、「千載一遇」の言葉どおり、本当に千年にたった一度しかないような機会にめぐり合えて、二〇〇〇年五月から京都大学人文科学研究所で客員研究員として京都に滞在することとなりました。

京都大学のメイン・キャンパスの近くには、京の四季を彩る琵琶湖疎水、哲学の道、銀閣寺が並立し、遠くには紅葉名勝の雄を誇る大原、三千院があります。キャンパスのすぐ外に「東大路（ひがしおおじ）」が走っており、古代のみやこのスケールを想像させます。小生は十年もの間、東大で過ごしたせいか、東大路を「とうだいろ」と読んでしまい、なぜ京大に続く道が東大路と名づけられたのか、何度も不可解に思い、少年のよう

な疑問を抱いておりました。

小生は、滞在中、研究所の研究班が主催する研究会にも度々参加させていただきました。研究会に出席することは小生にとって切磋琢磨の場の一つになっただけではなく、温故知新の場にもなりました。この研究班には、主催者、京大の教員のみならず、各大学からの教員諸賢も多く集まっておられましたから、研究会の席で懐かしい知人と再会したり、慕っている方と出会ったりできたのです。

研究班では、学問に対する精進を丹念に究めた証しを、ほぼ三年ごとに研究業績として編集出版し、学界に提供されているとのことです。このように研究業績が次々に出ることによって、より多くの学者を引き付ける吸引力を増加させ、業績も補強されてさらに高まるようになっていくもののようです。この研究班の能率は、そしてその秘められたパワーは一体どのようにして形成されたのか、という疑問を持ち続けております。機会があれば、「学問を究めるグループのシステム」について、諸賢のご高見をお伺いたいと思っております。

ところで、小生の宿舎となった京都大学国際交流会館は、京大と同じく左京区に位置しています。ここは一般に洛北と呼ばれているところで、天皇が学問に精進した修学院離宮も近くにあります。小生は滞在中、素顔の大文字と向い合って暮らしておりました。このエリアには詩仙堂、曼殊院、修学院離宮などの名勝も林立しているため、ぶらりと散策を満喫することがで

きました。

小生は毎日徒歩で研究室に通い、片道だけで一時間もかかる程の散策コースをいくつか見つけたものでした。ことに京大から吉田神社を通って哲学の道に入り、そして高野川の散策道に沿って、修学院へ至る道は最も楽しみのコースでした。時折京都の名川・鴨川と高野川に沿って、遠く貴船まで廻って宿舎に帰るのですが、回りの景色を愛でながら歩くと、知らずにたどり着いてしまったものでした。このように修学院、京大と御所のエリアを中心にして、充実した毎日を過ごしていました。ちょうど夏にあたり、目に青葉、耳に川音、川に亀や鰻や鯉の舞い踊りなどを、通勤中に肌身に感じ、まことに贅沢な通勤路に癒されながら行き来しました。そのおかげで、疲れ果てた心身が元気になり、科学の未来像に思いをめぐらしたり、研究者としての志を呼び戻したりすることができました。

三カ月の京都滞在中の主な活動場所は、京都大学の研究室と宿泊先とだけでした。しかし、以前に観光で来た時と違って、このたびは、京都を銘酒のようによく吟味することができました。最初に述べたとおり、小生は学問を磨く時期に東京暮らし一筋でしたが、学問にいっそうの精進を重ねるべき時期にようやく京都と出会えました。そして、京都を知るには、ある程度の鑑賞力を磨くことが必要であり、それを磨いた後にこそ、その価値がわかるようになると感じました。

このたびの滞在によって、小生が提唱している「中華世界秩

序原理」にいっそうの夢をかけることになりました。「中華世界秩序原理」を解明していく中で、その心境は京都への探求と同じではないかと思います。京都とは、「走馬看花（早馬に乗って、花を鑑賞すること）」すべきでないという誡めの言葉を心に留めて「品嘗」すべき古都であります。同様に、京大に対しても、その秘められたパワーと魅力を吟味し続け、諸賢方と共に「白髪が生えるまで」研究の道に励んでいきたいと思っております。

（台北・中央研究院近代史研究所研究員）

講演

夏期講座（二〇〇〇年度）　七月七日―八日　於　本館大会議室

テーマ「人種・民族・階級」

「人種」は存在するか

――文化人類学から語り直す――

竹沢泰子

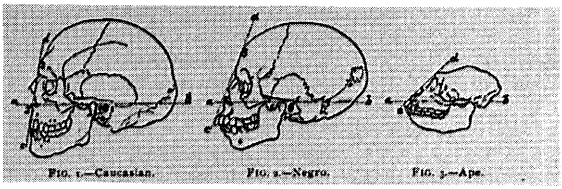
「人種」（race）という概念は、「人間の生物学的な特徴による区分単位」（広辞苑）として一般に理解されている。コーカソイド・モンゴロイド・ネグロイドの三大人種群、あるいはオーストラロイドなどを加えた五大人種群などが最もよく知られている。しかし結論から言えば、生物学的概念としての「人種」は存在しないというのが今日の欧米の人類学者間での一般的理解である。日本においても日本学術会議の部会の下に設置され私も関与した「人種・民族の概念検討小委員会」では、最終報告書において、人類集団にみられる変異は連続的なのであり、「現在では、人類集団をさらに人種という分集団に分類する生物学的根拠はないと考えられている」と明言している。

"race"という用語が人間の出自に関して用いられ始めたのは一七世紀初頭であり、日本語の古来からの「人種」という語が今日的な意味合いで使われ始めたのは江戸末期と言われている。そもそも上記のような人種分類は、一八世紀の近代科学の父祖たちが、身体形質、なかでも皮膚色を重視し、白、黒、黄などの色彩語彙を併用しつつ、人類集団を分類しようとしたものである。しかしその背景には、「存在の大いなる連鎖」、悪魔としてのサルに対するイメージ、旧約聖書の物語の曲解、「白」＝善、真実、純潔、「黒」＝悪、虚実、汚れなどとする色のシンボリズムなど、ユダヤ＝キリスト教世界における伝統的世界観が土壌として存在していた。そして一九世紀に入り、植民地主義の発展にともない、それぞれの「人種」は、西欧人を頂点

としたヒエラルキーのなかに位置づけられるようになった。しかし頭蓋骨の容量の差でもって「科学的」に証明されると信じられた人種間の差異や序列も、実際には科学者の偏見に基づく恣意的サンプル操作などによる捏造であったことは、近年グールドなどが明らかにしているとおりである。

世界の非工業化社会の諸地域には、ヨーロッパ人を「赤い人」、あるいは日本人や中国人を「白い人」と認識したり呼称をつけている事例が数々存在する。古典的な人種分類も、あくまでもそのような自己と他者との線引きに基づく極めて西欧中心的な世界観の反映に過ぎないと捉えることが現実に即した解釈であろう。

「人種」という用語の廃止を唱える研究者が存在することも事実である。が、歴史的な分類・序列化によって生じた「過去の重荷」、そして現存する人種差別の構造や、マイノリティのアイデンティティの問題を考える折、学問的にも、人種を社会的構築物として捉え直す視点が、広く求められていると言えよう。



コーカソイド，ネグロイド，類人猿の顔面角の比較（19世紀後半）

西南中国の民族と言語

——社会言語学の視点から——

池田　巧

中国の民族学研究者から「川西民族走廊」と呼ばれている四川省の西側から青藏高原へとつながる山岳地帯に居住するチベット系少数民族の言語と文化について、ここ数年のフィールドワークで得られた資料をもとに概観を行ない、民族のアイデンティティーの問題について考察した。

まず四川省の東半分の広大な四川盆地は三国時代に劉玄徳が都を置いたことでもよく知られる漢文化圏であるが、西側の山岳地帯は古代から現在に到るまでチベット文化圏に属することを解説し、省都の成都から東チベットの中心都市であるデルゲ（徳格）までのルート「川藏公路」沿いにチベット文化圏の広がる道

筋を地図でたどった。デルゲはデルゲパルカン（徳格印経院）というチベット大蔵経の経典印刷所がある街として仏教研究においてはつとに有名で、現在でも昔ながらの木版印刷を行なっている。しかし成都から車で約一週間を要する内陸に位置する街であるため、この地を訪れた外国人は極めて少ない。一九九八年夏にトヨタ財団の研究助成を得てジャーナリストの中西純一氏とともに現地を訪問した際に撮影したビデオを上映し、木版印刷の工程とデルゲのチベット文化、およびチベット語デルゲ方言について紹介した。

いっぽう「川西民族走廊」にはチベット語とは異なる約一三種類の少数言語が話されている。これら少数言語の話し手の宗教・生業・建築などはいずれもチベット文化の特色にあふれ、民族のアイデンティティーもチベット人であるけれども、家庭と村落内部では母語として「地域語」を話し、商用などで街に出ると公用語である漢語の四川方言か民族語であるチベット語カム方言を話している。これらの少数言語はいずれも今世紀に入ってからその存在が確認されたもので、話し手の人口もそれぞれ数千人規模と推定されているが詳細は不明。その類型構造の研究は、歴史的記録の少ないチベット系諸語がたどった歴史的変化の過程を跡づけるうえで貴重な情報を提供してくれる。いわば活きた化石のような極めて貴重な存在であるにもかかわらず、いずれも「地域語」として扱われて中国の言語政策の対象とはなっていないため、存亡の危機に追いやられる可能性があるという実情についてやや詳しく指摘した。詳細については拙稿「山の道」大修館書店『月刊言語』二〇〇〇年六月号を参照されたい。

「故郷でインドを想い眠る」

――前近代におけるインドとイスラーム世界の人的交流――

真下裕之

題に掲げたのは、十八世紀にインドを訪れたイラン出身の詩人の詠んだ次のような対句の一部である。

毎夜、故郷でインドを想い眠る
インドの享楽・歓楽を見たものは皆

ペルシア語で詠まれたこの詩では、故郷に戻った詩人が、かつて滞在したインドの宮廷での楽しき日々を懐かしんでいる。故国イランでは得られない経済的・社会的栄達を、この詩人はインドに見いだしたらしい。

十三世紀以来、イスラーム世界では詩人たちの伝記集が書かれ続けた。「詩人伝」と呼ばれるこのジャンルの文献からは、インドとイラン・中央アジアなどの地域との間で、詩人たちの活発な往来がかいま見える。右の詩人のような例は、けっして珍しいものではない。

そのような移動の前提となるのが、これら諸地域において等しく文化語、公用語として用いられたペルシア語の存在である。ペルシア美文の素養を備えたペルシア詩人たちは、イスラーム政権の文書行政を支える人材として、支配者層の手厚い保護を受けて活動した。ペルシア語を軸にしたこのような共通の文芸文化圏を、最近の研究者は「ペルシア語文化圏」と呼ぶことを提案している。

詩人たちの移動のパターンについて注目すべきなのは、これら諸地域出身の詩人たちがインドに向かう例は数多く見られるにもかかわらず、逆にインド出身の詩人たちが他地域へ向かう例はきわめて少ないことである。この傾向は、十九世紀前半まで変わることはない。そして、冒頭の詩に見られるとおり、インドに到来した詩人たちは、ペルシア語文化圏の他の地域よりも手厚く遇されたのである。

このような一方通行の人材移動の背景について、他地域における政治的混乱や宗教的迫害などのプッシュ要因が主たるものとは考えられず、インド側のプル要因を考えるべきである。詩人伝の記録からは、インドにおいてペルシア文芸の素養を身につけるのは至難の業であったことがほの見える。にもかかわらず、インドのイスラーム政権においてペルシア語は文化語・公用語であり続けた。社会の枠組みを支えるために、外来の有能な人材が厚遇された事情は、このような文化的落差にあると考えられる。

ペルシア文学史においては、十六世紀以降は「インド様式」の時代であり、ペルシア語文化圏のいかなる地域よりも、インドにおいて圧倒的な数のペルシア語文献が書かれた。その生産力は、このような外来の人材の流入によってつねに刺激され続けていたと考えられる。

インドのイスラーム教徒とカースト制度

——身分の高い「民族」と低い「民族」の分類をめぐって——

小牧幸代

平等主義的なイスラームの理念と、人間を生まれに基づいて上下に配列する身分制度としてのカーストのイデオロギーは、互いに相容れない性質のものである。だが、インドのイスラーム教徒の社会には、カースト的な分類とそれを維持する社会慣行が存在する。

この社会で、社会的に上位に位置づけられるイスラーム教徒は「アシュラーフ」（アラビア語起源の言葉で「高貴な身分のイスラーム教徒」を意味）と総称される。アシュラーフに分類されるのはサイヤド、シェーフ、ムガル、パターンという4つの集団である。これら4集団の名祖はアラブ、イラン、トルコ（中央アジア）、アフガニスタンなどの「外国」、つまりインドではない地に起源をもつとされる。

それに対して、社会的に下位に置かれるイスラーム教徒はインドに起源をもつイスラーム教徒、すなわち改宗前は様々な職能カーストに属するヒンドゥー教徒であったといわれる。アシュラーフではないとされる彼らは、ヒンドゥー教徒のように「伝統的」職業を基盤とした職能集団に属している。例えば、織工、鍛冶屋、大工、石工、肉屋、菓子屋、油屋、洗濯屋、造り酒屋、旅館・飲食店、土器造り、綿屋、仕立屋、染屋、床屋、牛乳屋、腕輪屋、給水、楽隊、吟唱詩人・系図詠み、物乞いなど。

「アシュラーフ」と非アシュラーフ——「高貴な身分のイスラーム教徒」と、そうではないイスラーム教徒——、両者の区別は民俗語彙における二分法からも明らかである。「身分の高い民族（ウーンチー・コウム）」と「身分の低い民族（ニーチー・コウム）」、「奉仕を受ける人（ジャジマーン）」と「奉仕を提供する人（カミーン）」、「大土地所有者（ザミーンダール）」と「職人（ダストカール）」、「先進階級」と後進階級など。

このように、インドのイスラーム教徒の社会は観念上、上下に大きく二分されている。その境界を維持するための主要な装置として、両者間には招待・訪問や共食といった社会的交流がないこと、厳格な婚姻規制によって姻戚関係を結ぶことが回避されていることなどの社会慣行をあげることができる。

このような序列に対して反発はないのだろうか。社

会的に下位に位置づけられてきた職能集団は、事実、地位上昇運動を展開してきた。例えば、集団の名称の変更（「高貴な身分のイスラーム教徒」の名称のあり方を模倣）、社会慣習の変更（婚姻儀礼や衣服などをイスラーム的だとされるものへと変更）、宗教実践の変更（ヒンドゥー教徒の祭礼への参加を断念。イスラーム復興運動に積極的に参加）など。

ただし、集団名の改称が「高貴な身分のイスラーム教徒」の模倣であるのに対して、社会慣習や宗教実践の変更は「高貴な身分のイスラーム教徒」に対抗するものである。そこでは「高貴な身分のイスラーム教徒」は生まれはイスラームの中心により近いかもしれないけれども現実のふるまいは必ずしもイスラーム的ではない、自分たちのほうがイスラームの教えを忠実に実行している、あるいはイスラームにおいては全てのイスラーム教徒は平等なのであるから「高貴な身分のイスラーム教徒」と自分たちの間に序列はないのだといった主張がなされている。

しかしながら、このような地位上昇運動は現代インドの留保制度によってブレーキをかけられる傾向にある。留保制度が提供する優遇措置のために、後進階級に分類された彼らの間ではジレンマも生じている。

さて、現代インドのカースト制度は、果たして古代インドの『マヌ法典』の時代から連綿と続いてきたものなのだろうか。今日の研究者は、「ヒンドゥー教」が「発見」されたイギリス植民地時代に、それが「想像」または「創造」されたのではないかという論を立てる。彼らは一九世紀の資料に遡って、それを実証する作業に取り組んでいる。

最後に――、ここでは「人種・階級・民族」という今日では当たり前のように受け取られている概念を、その概念が成立した社会背景に立ち戻って再考するというテーマのもとで、現代インドのイスラーム教徒のカースト制度を取り上げた。民族、宗教、カーストに基づく分類は、時代や社会状況に応じて変化するものであり、非歴史的なものではありえない。カースト的地位の上昇運動は、その具体例を提供する。こうした社会内部のダイナミズム、変化を求める動きは、現実にとどまることを知らないのである。

開所記念講演会（二〇〇〇年度）

十一月十八日

於　本館大会議室

簠簋（ホキ）の名物学

木島史雄

まずタイトルを解説しておきましょう。簠簋というのは、お祭りの際、お供えを盛る容器のことです。つぎに「名物学」ですが、これは名前と実物をどうつなぐかという事を考える学問です。したがって今日のお話は、簠簋という容器の名前と実物、とりわけその形についてのお話です。

図1は、東京の湯島聖堂に伝来した簋の姿です。非実用的な、まことに奇妙な形のものといってよいでしょう。図2は、考古学による中国古代青銅器の簋の姿です。そして両者が、同じ「簋」という名前で呼ばれています。この奇妙な形や相違はどこから生じたのでしょうか。

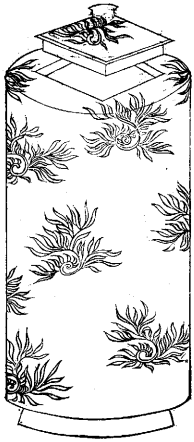


図　1

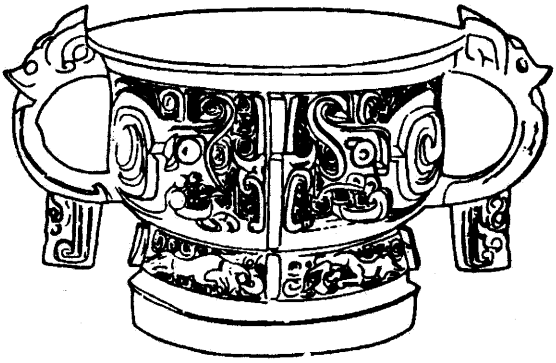


図　2

図1の簋は、実は文字資料から復元的に作り出された形態なのです。ある書物に、「内方外圓を簋と曰ふ」（二要素定義型）とあります。まさに図1の姿の元になる文章といえます。しかしもっと遡ってみると、最も古い文献では、内外を分けずに「円きを簋という」（一要素定義型）と記述されていました。

ところである古典は簋を「員くして規に中（あた）る。」と記しています。規というのはコンパスのことですから、ぴったりコンパスで描いたように丸いというのがこの文章の意味でした。ところがその注釈に「器の圓中なる者を簋と爲す。」とあり、そしてこの「圓中」を、「中が円形のもの」と解釈したところから、器の内外の形を別々に規定するという考えが始まったのではないかと思われます。そしていったんこの考え方がはじまると、物事をすべて陰陽にわけて、それの積み上げでこの世界ができていると考える中国人の思考様式に大変なじみやすいものであったために、この形式が急速に広がってゆきました。

さて近代考古学によって、古代の簋の姿が明らかになりました。それが図2です。歴史的には、これこそが正しい簋の姿です。しかしだからといって、ここで古典の記述を斥けてしまうわけには行きません。というのは、ここ二千年ばかり、中国では二要素定義が正当の解釈とされ、これを基礎にしてさまざまな学術が展開してきているからです。古典の世界では二要素定義型の簋こそが真実の形態なのです。

そしてこの二つを両端にして、さまざまな見解が提示されてきました。ある時代には古典の簋と発掘品の簋を無理にも同じモノとして考えようと試みていますし、また違いに目をつぶって両者の記述を載せてしまう百科事典もありました。たしかに古代中国に存在した簋は一種類ですが、それとは別に、さまざまな学術が、それぞれの拠所と手法をもって研究した簋の姿は、それぞれの世界において、どれも真実だったのです。それは「一つの事実と百の真実」と表現してよいかと思います。

祭式と輪廻

――古代インド再生説の展開――

藤井正人

死後、人間を含めたさまざまな存在に生まれ変わる

という再生・転生の考えは、多くの文化に見られる。特にインド・ヨーロッパ諸語を話す諸民族は、古くからこの考えを共有していたようである。しかしインドにおいては、この観念は単なる民話や民間信仰のレベルを越えて、ほとんどすべての宗教や哲学の根幹を形成してきた。たとえば、仏教などで最高の目標とされる「解脱」は、終わることなく生死を繰り返す輪廻的なあり方からの解放にほかならない。インドの輪廻思想の特徴は、業理論（行為とその結果の必然的な結び付き）にもとづいた冷厳な論理と、再生のプロセスに関する一定のストーリーとを持っていることである。そのような輪廻説が成立する過程で論理とストーリーに枠組を提供したのは、ヴェーダ祭式をめぐって展開された古代インドの祭式思弁であった。

初期のヴェーダにすでに現われている祭式の効果（功徳）に関する思想と、祭式の最高の効果として天上界へ昇るという思想は、ヴェーダの後期になって思わぬ方向へ展開していった。この二つの思想がからみ合って、輪廻思想へと変質していったのである。祭式によって死後、天上の楽が得られるという「オプティミズム」が、その先にさらなる生死の繰り返しを見出すことによって、同じ再生への道筋に対して正反対の「ペシミズム」へと一変してしまったのである。祭式思弁の枠組の中でこのように形成された輪廻説は、ウパニシャッドにおいて祭式の文脈を離れて、人間存在そのもののあり方として説かれるようになる。そこでは輪廻の原因として、祭式行為に限定されない行為一般と、行為を起こす欲望とが問題とされるに至る。ヴェーダ祭式を否定する仏教が引き継いだのは、まさにこの、ヴェーダ祭式をめぐって形成され、ウパニシャッドで確立された輪廻思想であった。

元曲「盆児鬼」考

——しゃべるお碗の話——

金　文京

本講演では、中国宋代の実在の名裁判官、包拯（九九九—一〇六二）を主人公とする物語の中でもとりわけ有名な元代の芝居（元曲）「盆児鬼」について、その説話的背景を紹介した。まず「盆児鬼」の粗筋を『元曲選』本によって述べる。

開封の商人、楊国用は街で占師から、「百日の災あ

り、千里の外に難を避けるべし」と言われ、従兄弟の趙客から金を借り、避難兼商売のため南方に旅立つ。金をもうけた楊国用、開封の近くまで帰ったところで数えて見ると旅に出てちょうど九十九日、あと一日で百日になると思い、宿屋に泊まる。その宿屋は、素焼き作りの盆罐趙夫婦がやる黒店（客を殺し金を奪う宿）で、盆罐趙は楊国用の金を奪ったうえ殺し、証拠隠滅のため死体を焼いて、骨灰を素焼きの盆（お碗）にし、それを知り合いの張懺古にあたえる。骨盆についた楊国用の亡霊（盆児鬼）は自分が殺された経緯を話し、開封府知事の包拯に代りに訴えてくれるよう張懺古に頼む。張懺古は包拯に訴えるが、盆児鬼は包拯の前でなにも話さない。あとで聞くと、茶を飲みにいっていた、餅を食いにいっていたとはぐらかす。しかし最後は役所の門に貼った門神像のため中に入れないことが分かり、門神像を剝がし、盆児鬼が直接、包拯に訴え、盆罐趙は逮捕処刑される。

この話はヨーロッパや日本などに広く分布する「歌い骸骨」型の昔話にきわめてよく似ている点が注目される。盆は骸骨の変形であろう。「歌い骸骨」で、殺された人間の骨が口をきいて殺人を暴露する点などの細部も共通する。またこの話の中国、日本における古い形態を伝える敦煌本『搜神記』や『日本霊異記』の話では、亡霊が自分を助けた恩人に供養の儀式の場で食物を食べさせることになっているが、この点は「盆児鬼」で楊国用が茶を飲み、餅を食べるのに対応していよう。ただ「歌い骸骨」では、たいてい二人の兄弟が旅に出て一方がもう一方を殺すことになっているが、「盆児鬼」はそうではない。しかし「盆児鬼」のより古いテキストでは、楊国用と義弟の趙客が旅に出て、ともに盆罐趙に殺されることになっており、おそらく元来は趙客が楊国用を殺す話であったのが、宿屋での殺人という趣向を用いたため、殺人者が同姓の盆罐趙に移り、そのため不要となった趙客は『元曲選』本で消えてしまったと考えられる。このように「盆児鬼」は、世界中に広がる普遍的な説話に基づきながら、それが元来もっていた宗教的性格をさまざまな演劇的趣向に置き換えた作品であった。とくにこの陰惨な物語をまったくの喜劇に仕組んだ点に、「盆児鬼」の演劇として到達度の高さが認められる。

退官記念講演

二〇〇〇年三月九日
於　本館大会議室

小さな発見の喜び

吉川忠夫

私はこれまで中国の古い書物をしこしこと読んできた。そんなことを四十年余りもつづけていると、これは発見ではないかと私かに思うことがやはりないわけではない。発見といっても、それで世の中がどう変わるというような大げさなものではないが、ささやかな発見にもそれなりに読書の喜びがあるものだ。その中から三題を取り上げる。

一　「欧陽詢と江総」。唐初を代表する書家の一人の欧陽詢は、父親が謀反の罪で誅殺されると、彼も従坐すべきところをかろうじて命を免れ、江総に引き取られて養育されたという。江総は陳代の大官であり、また文学者。『唐書』欧陽詢伝の記事は至ってそっけないものなのだが、道宣撰の『広弘明集』が収める「庚寅の年の二月十二日、虎丘山精舎に遊ぶ」を詩題とするところの江総の五言詩とそこに付されている注を読み合わすことによって、『唐書』の記事を豊かにふくらませることができる。

二　「『劉子』の著者は劉晝」。『劉子』あるいは『新論』とよばれて伝わる書物の著者は誰なのか。これまで何人かが候補に擬せられ、なかでも北斉の劉晝が限りなくさいと論じられてきたけれども、残念ながら状況証拠にとどまっていると言わざるをえない。ところが『広弘明集』の「叙列代王臣滞惑解」に劉晝が『劉子』の著者であるに違いない決定的な証拠が発見されるのだ。『広弘明集』のその篇では、唐初の傅奕が編んだ排仏家列伝とでも称すべき『高識伝』を適当につまみながら反駁が加えられているのだが、そこに排仏家の一人として劉晝の名も挙がっている。そして道宣が劉晝の排仏の議論を反駁すべく皮肉たっぷりに用いている文章が、ほとんどまったくそのままに『劉子』の妄瑕篇に見出されるのだ。道宣にとっては劉晝が『劉子』の著者であることは自明のことであったのであり、相手を批判するにあたって、相手の言説を持ち出して揚げ足を取るのは最も有効で意地の悪い方法であろう。

三　「曇鸞と陶弘景」。『続高僧伝』によると、中国浄土教の祖師である北魏の曇鸞は『大集経』注釈の仕事のなかばにして病に冒されるや、命あっての物種とはるばる江南に神仙家の陶弘景を訪れ、仙経十巻を授かってもどってきたものの、菩提留支のきつい戒めによって仙経のすべてを焼き捨ててしまったという。ところが曇鸞の『浄土論註』には、『抱朴子』からの引用のほか、陶弘景の撰著である『本草集注』を明らかに下敷きとしたとしか考えられない文章が存するのであって、『続高僧伝』の記事に一棒をくらわす。

古代中国思想史における「真」字の思想史をめぐって

――敗残兵の弁――

荒牧典俊

東漢から東呉をへて西晋に至る時代の、蒙古平原から山東を経て江水流域に達しさらに四川に及ぶ広い周辺地域の墓葬遺物の中に小佛像が出現しはじめる現象は、いまや多くの研究が積み重ねられて「佛教初伝」の物証であることに何の疑いもない。しかし、そもそも木・石の棺・槨の各面や壁画墓・画像石墓・祠堂からはじめて墓葬遺物には、どのような宗教的意味をもった絵画が画かれるのか、そこに小佛像が出現するとは、どのような思想史的意味をもつのか、などという問いは、いまだ、ほとんど答えられていない。従来までの漢代画像シンボリズムの多くの個別研究を読み漁って、わたくしが到達した結論は、それらは、全体としては、おそらく「眞」字の思想史の諸相を画いている、つまり父祖達が、どのように「真」になっているか、そして子孫達が、かれらを祭祀して、どのように「真」になるか、という宗教体験史の諸相を画いてい

る、と考えれば、統一的に解釈し得る、ということであった。そこで「真」字の思想史からして、それらの画像シンボリズムを読み解いて、そこに小佛像が出現する思想史的意味を確認しようとしたのだが、これが難問中の難問だった。いま敗残兵の弁をなさざるを得ない所以である。

当然のこととして顧炎武『日知録』巻二十「破題用荘子」条の

「五経に『真』字無し。老荘の書にして初めて見ゆ」

から出発したのだが、顧炎武自身は、「真」字の思想史に関心をもたなかった如くであって、「真」字の思想史の秘密を看破していたのは、段玉裁『説文解字注』「真」「慎」「㝵」などの諸字条であった。段注の含意する「真」字の思想史を門外漢なりに整理してみると、「真」字の思想史の本流は、むしろ「慎」字の思想史であって、それは、古文「㝵」字[1]の思想史となるであろう、それを解明した上で『老子』において、どのような意味をもって「真」字が出現したか、そしてどのように「㝵」字が「慎」字へと交替していくか、を解明しなくてはならぬ、ということであった。それでは、古文㝵字の思想史は、どのようにあとづけられるか――というならば、ごくごく要約して、つぎの如くか。

(1) 甲骨文「⿱米人」字　殷王朝の国家祭祀たる「㝵」祭は、その本性において「献俘礼」であって、多数の俘を殺して犠牲にし、かれら犠牲の肉を木組みの上で炎上させて「帝」とよばれる共同存在を現成させ国家共同体を再生させようとしたのであろう。

(2) 金文「㝵」字　周王朝の国家祭祀は、たしかに殷王朝の国家祭祀「㝵」祭を継承するのだが、それを「㝵罰」とした（「㝵」字の字形が証する！）上で、新たに周王朝に独自の封建祭祀を行って「明徳」する――即ち豊京の宗周に「天」あるいは日月を象徴する璧玉を安置しておいて、公・侯・伯・子・男などに圭玉を授与して封建し、祭器などを授与して冊命する――ことによって国家共同体を再生し存続させようとしたのであろう。

(3) 『老子』における「真」字　周王朝の統合が弛緩してしまって、各地の諸「侯王」達が、かってに墓をつくり宗廟を建てて祖先祭祀しはじめたのであったが、かれらは、周王の天命のカリスマによってではなくして、かれら自身が、いわば主体的あるいは実存的に「道」を体得して「真」であることによって、祭祀される祖父達が「真」であり、祭祀する子孫も「真」である所以を肯定しようとしたのではないか。

なお最近年、出土の『郭店楚簡』は、『老子』において「真」字が、甲骨文「鼎」字に由来する「貞」字であったことを明示する如くだ。何倩『商文化窺管』一九九四によれば、「貞」字は、(1)帝あるいは天あるいは父祖の存在を象徴する祭器たる「鼎」即ち「貞」、(2)帝あるいは天あるいは父祖に卜問する「貞」、(3)帝あるいは天あるいは父祖からの天意によって証知する「貞」の三義を兼ねるという。そのような「貞」字であれば、ごく自然に「真」字へと分化していくであろう。また『郭店楚簡』は、「脀」字が、いまだ中途段階の「訢」字であって、「慎」字になりきっていないことをも示している。

以上のような古文「脀」字の思想史が、さらに『荘子』以下の戦国秦漢の諸書を経て房中術の「真」になり、さらに『周易參同契』の「真」になったところで初期漢訳仏典の「正真」になることを解明すべきであったのだが、すべて果たせなかった。かえす、がえす敗残兵の弁をなさざるを得ない所以である。

文』の『尚書』「舜典」に対する釈文が、古文「脀」字を保存している所以を詳細に解明した御論考「舜典釈文考」(『東方学報』京都七二冊)を恵送いただいた。誌して感謝申し上げる。

(1) 本研究所の同僚であった木島文雄氏からは、魏石経『尚書』が古文「脀」字を保存していることなどを御示教いただき、かつ段玉裁が引用する陸徳明『経典釈

彙　報

（二〇〇〇年一月より十二月まで）

おくりもの

。岡村秀典助教授は、第十三回濱田青陵賞を受章（九月三十日付）。

訃　報

。島田　虔次名誉教授（八二歳）は、三月二一日逝去。

。藪内　清名誉教授（九四歳）は、六月二日逝去。

。坂田　吉雄名誉教授（九三歳）は、八月二四日逝去。

。飛鳥井　雅道名誉教授（六五歳）は、八月三一日逝去。

人のうごき

。吉川忠夫（東方部）教授は、停年により退職（三月三一日付）、花園大学客員教授に就任（四月一日付）。

。荒牧典俊（東方部）教授は、停年により退職（三月三一日付）、大谷大学教授に就任（四月一日付）。

。勝村哲也（附属東洋学文献センター）教授は、停年により退職（三月三一日付）、島根県立大学教授に就任（四月二日付）。

。高田京比子（西洋部）助手は、神戸大学文学部講師に昇任（四月一日付）。

。桑山正進（東方学研究部）教授を、附属漢字情報研究センター長に併任（四月一日～二〇〇一年一〇月三一日）。

。濱田正美神戸大学文学部教授は、併任教授（文化研究創成研究部門、四月一日～二〇〇一年三月三一日）。

。中谷文美岡山大学文学部助教授は、併任助教授（文化研究創成研究部門、四月一日～二〇〇一年三月三一日）。

。富永茂樹（西洋部）助教授は、当研究所（人文学研究部）教授に昇任（四月一日付）。

。金文京（東方部）助教授は、当研究所（東方学研究部）教授に昇任（四月一日付）。

。冨谷至（東方部）助教授は、当研究所（東方学研究部）教授に昇任（四月一日付）。

。水野直樹（日本部）助教授は、当研究所（人文学研究部）教授に昇任（四月一日付）。

。井波陵一（附属東洋学文献センター）助教授は、当研究所（附属漢字情報研究センター）教授に昇任（四月一日付）。

。武田時昌（東方部）助教授は、当研究所（附属漢字情報研究センター）教授に昇任（四月一日付）。

。船山徹九州大学文学部助教授は、当研究所（東方学研究部）助教授に転任（四月一日付）。

。安岡孝一大型計算機センター助教授は、当研究所（附属漢字情報研究センター）助教授に配置換（四月一日付）。

。高階絵里加氏を、助教授（人文学研究部）に採用（四月一日付）。

。守岡知彦氏を、助手（漢字情報研究センター）に採用（四月一日付）。

。大原嘉豊氏を、助手（東方学研究部）に採用（四月一日付）。

。中西裕樹氏を、助手（東方学研究部）

に採用（四月一日付）。

海外での研究活動

。大浦康介助教授（人文学研究部）は、文部省科学研究費補助金により、平成十一年十二月二五日大阪発、フランス国立図書館、ＣＮＲＳ、パリ第八大学に於いてアヴァンギャルド芸術研究に関する資料収集を行い、一月十日帰国。

。宇佐美齊教授（人文学研究部）は、文部省科学研究費補助金により、一月二日大阪発、パリ第四大学、フランス国立図書館に於いてアヴァンギャルド芸術の研究に関わる調査及び資料収集を行い、一月十五日帰国。

。勝村哲也教授（附属東洋学文献センター）は、一月十日大阪発、カリフォルニア大学ロサンゼルス校、カリフォルニア大学バークレイ校、サンフランシスコ市立大学リッチー研究所に於いて漢籍・朝鮮本の調査を行い、一月二一日帰国。

。金文京教授（東方学研究部）は、平成十一年九月二三日大阪発、台湾大学文学院中国文学系に於いて中国の小説、演劇及び講唱文学の演変に関する研究及び講演を行い、一月二八日帰国。

。勝村哲也教授（附属東洋学文献センター）は、在外研究員旅費により、一月二七日大阪発、国立国語研究所（大韓民国）に於いて韓国語文献処理に関する日韓共同ワークショップを開催し、一月三十日帰国。

。横山俊夫教授（人文学研究部）は、在外研究員旅費により、一月二七日大阪発、国立国語研究所（大韓民国）に於いて韓国語文献処理に関する日韓共同ワークショップを開催し、一月三十日帰国。

。池田巧助教授（東方学研究部）は、文部省科学研究費補助金により、一月二五日大阪発、香港城市大学、澳門大学、中国チベット学研究センター、社会科学院民族研究所、中央民族大学に於いてチベット系少数言語に関する資料収集およびマカオの言語保存運動についての資料収集を行い、二月四日帰国。

。富永茂樹教授（人文学研究部）は、文部省科学研究費補助金により、一月二八日大阪発、社会科学高等研究院（フランス）フランス国立図書館に於いて一七八九年人権宣言成立過程の研究にかかわる打合せおよび資料収集を行い、二月十一日帰国。

。髙嶋航助手（東方学研究部）は、文部省科学研究費補助金により、二月十六日大阪発、上海図書館、蘇州大学、蘇州図書館に於いて中国近代土地・徴税制度関係の資料収集を行い、二月二六日帰国。

。田中淡教授（東方学研究部）は、三月一日大阪発、大明宮含元殿遺跡（中華人民共和国）に於いて同遺跡保存修復専門家会議に出席し、三月四日帰国。

。岡村秀典助教授（東方学研究部）は、文部省科学研究費補助金により、二月二八日大阪発、夏県東陰遺跡、陝西歴史博物館、浙江省博物館、上海博物館に於いて都市遺跡の調査を行い、三月十日帰国。

。勝村哲也教授（附属東洋学文献センター）は、文部省科学研究費補助金により、三月十日成田発、カリフォルニア大学バークレー校・サンディエゴ校、サンフランシスコ市立大学に於いて朝

鮮本漢籍の調査とディジタルネットワーク構築協議を行い、三月十五日帰国。

○金文京教授（東方学研究部）は、文部省科学研究費補助金により、三月十四日大阪発、ソウル大学に於いて奎章閣所蔵の資料調査を行い、三月十八日帰国。

○麥谷邦夫教授（東方学研究部）は、文部省科学研究費補助金により、三月十一日大阪発、上海社会科学院、茅山、泰山、北京大学に於いて衛星画像を利用した中国宗教地理学構築の試みに関する現地調査を行い、三月二四日帰国。

○籠谷直人助教授（人文学研究部）は、三月十七日大阪発、ロンドン大学、国立公文書館に於いて一九三十年～五十年代のアジア国際秩序についての予備会議および日本―インドの綿業通商摩擦交渉記録の閲覧を行い、三月三一日帰国。

○東郷俊宏助手（東方学研究部）は、三月二十日大阪発、北京・崑崙飯店に於いて老中医臨床実技の記録・調査を行い、北京中医薬大学、北京中医研究院に於いてチベット医学史研究の打ち合わせを行い、三月三十日帰国。

○水野直樹教授（人文学研究部）は、三月五日成田発、ロシア国立社会政治史文書館に於いて朝鮮関係文書の資料調査を行い、四月二日帰国。

○高田時雄教授（東方学研究部）は、委任経理金により、四月一日大阪発、香港大学、マカオ文書館に於いて十六・十七世紀アジアの言語接触に関する資料収集を行い、四月六日帰国。

○真下裕之助手（東方学研究部）は、委任経理金により、四月一日大阪発、香港大学、マカオ文書館に於いて十六・十七世紀アジアの言語接触に関する資料収集を行い、四月六日帰国。

○竹沢泰子助教授（人文学研究部）は、文部省科学研究費補助金により、四月十三日成田発、ワシントン大学、カリフォルニア大学バークレー校に於いて社会的構築物としての人種概念に関する理論的考察に関する資料収集を行い、四月二五日帰国。

○髙木博志助教授（人文学研究部）は、五月十七日大阪発、ソウル・新陽パークホテル、求禮韓国通信研修院に於いて第四回「東アジア平和と人権」国際シンポジウムに参加、討議および司会を行い、五月二一日帰国。

○金文京教授（東方学研究部）は、五月十四日大阪発、中国・復旦大学、南京大学に於いて明清文学と性別国際学術討論会に出席および論文発表を行い、五月二二日帰国。

○井狩彌介教授（人文学研究部）は、文部省科学研究費補助金により、五月二一日大阪発、ハーバード大学に於いてヴェーダ・ヴァードゥーラ学派文献に関する共同研究および講演を行い、五月二九日帰国。

○瀧井一博助手（人文学研究部）は、文部省科学研究費補助金により、五月三十日大阪発、ウィーン大学法制史研究所、オーストリア国立図書館、ケルン大学に於いて明治期お雇い外国人法律家に関する研究打合せおよび関係資料調査、前ドイツ国外務参事官バルトホルトヴィッテ博士邸、ハンブルク市立図書館に於いてお雇い外国人カール・ラートゲン関係資料の調査を行い、六

月十三日帰国。

。高田時雄教授（東方学研究部）は、委任経理金により、六月二一日大阪発、首都師範大学、北京図書館に於いて十六・十七世紀アジアの言語接触に関する資料収集、敦煌蔵経洞発見一百年記念国際学術会に議に出席し、六月二五日帰国。

。スタファン・ローゼン外国人研究員は、七月十九日大阪発、檀国大学（大韓民国）に於いて韓国史に関する研究打合せ及び資料蒐集を行い、七月二六日帰国。

。高木博志助教授（人文学研究部）は、八月二日大阪発、上海国際問題研究所、上海社会科学院、復旦大学日本研究所、上海博物館に於いて上海からみた日本の「アイデンティティ」と「文化」をめぐる研究を行い、八月五日帰国。

。田中雅一助教授（人文学研究部）は、文部省科学研究費補助金により、八月四日大阪発、アムステルダム大学、大英図書館、エジンバラ大学に於いて南インドのジェンダーについての資料収集を行い、八月十六日帰国。

。金文京（東方学研究部）は、文部省科学研究費補助金により、八月九日大阪発、北京大学に於いて明清戯曲小説についての研究打合せ及び資料収集、恩州市文化局に於いて宋代戯曲資料の収集、上海図書館に於いて明清小説についての資料収集を行い、八月十七日帰国。

。高木博志助教授（人文学研究部）は、八月二一日大阪発、台湾・故宮博物院に於いて近代国家と民衆統合の研究に関する資料調査、台北市内の寺院に於いて「忠烈祠」の調査、台湾中央研究院近代史研究所に於いて近代国家と民衆統合の研究に関する資料調査を行い、八月二四日帰国。

。前川和也教授（人文学研究部）は、七月十七日大阪発、大英博物館に於いてシュメール行政・経済文書の研究を行い、八月二六日帰国。

。中西裕樹助手（東方学研究部）は、文部省科学研究費補助金により、七月二七日大阪発、中国・海豊県県誌弁公室に於いてショー語の調査及び資料収集、香港中文大学、香港城市大学に於いて中国における言語接触に関する資料収集を行い、八月二六日帰国。

。森本淳生助手（人文学研究部）は、京都大学後援会助成金により、一九九九年十一月一日大阪発、近現代テクスト草稿研究所（フランス）に於いてポール・ヴァレリーと同時代思想に関する研究を行い、二〇〇〇年八月三一日帰国。

。池田巧助教授（人文学研究部）は、文部省科学研究費補助金により、七月二六日大阪発、香港城市科技大学、四川大学西南民族学院、康定県文化局、道孚県文化局に於いてチベット系少数言語の記述調査を行い、九月一日帰国。

。曽布川寛教授（東方学研究部）は、八月二七日大阪発、上海博物館に於いて中国美術の調査及び資料蒐集を行い、九月一日帰国。

。上野成利助手（人文学研究部）は、文部省科学研究費補助金により、八月二八日大阪発、ロンドン大学図書館、ドイツ国立図書館に於いて二十世紀前半における「脱近代」論に関する文献資料の調査収集を行い、九月六日帰国。

。船山徹助教授（東方学研究部）は、文部省科学研究費補助金により、八月二五日大阪発、モントリオール・コンヴェンション・センターに於いて第三六回国際アジア・北アフリカ研究会議に出席し論文発表を行い、九月五日帰国。
。大浦康介助教授（人文学研究部）は、七月十三日大阪発、オーベルヴィリエ劇場（フランス）に於いて日・中・仏演劇プロジェクトへ参加し、アヴィニョン市内演劇祭会場に於いてアヴィニョン演劇祭に出席し、フランス国立図書館に於いてアヴァンギャルド芸術の研究に関する資料収集を行い、九月五日帰国。
。田中淡教授（東方学研究部）は、九月五日大阪発、台湾中央研究院に於いて「植民地支配下のアジアの都市と建築の歴史」国際シンポジウムに出席し、九月八日帰国。
。狭間直樹教授（東方学研究部）は、九月五日大阪発、中国社会科学院近代史研究所に於いて「近代中国と世界」に関する国際シンポジウム出席及び資料蒐集、研究打合せを行い、九月十二日帰国。
。森時彦教授（東方学研究部）は、文部省科学研究費補助金により、九月八日大阪発、中国社会科学院近代史研究所に於いて中国近代の人口動態関する研究打合せ、北京図書館及び北京大学に於いて中国近代の人口動態関する研究打合せ及び資料蒐集を行い、九月十五日帰国。
。水野直樹教授（人文学研究部）は、九月五日大阪発、ロシア国立社会政治史文書館に於いて朝鮮関係コミンテルン文書の調査を行い、九月十七日帰国。
。瀧井一博助手（人文学研究部）は、九月五日大阪発、ウィーン大学法学部法制史研究所に於いて一九世紀ドイツ法学の日本イメージについての研究打合せ、ライプチヒ民族学博物館に於いて明治期お雇い教授カール・ラートゲン収集日本コレクションの調査、イエナ大学に於いて第三三回ドイツ法史学者大会出席、オーストリア国立図書館に於いて十九世紀ドイツ語圏新聞から日本関連の記事の調査を行い、九月十九日帰国。
。冨谷至教授（東方学研究部）は、九月十六日大阪発、西安市内に於いて漢代陵墓等石刻調査、西安大学に於いて石刻に関する研究打合せを行い、九月十九日帰国。
。麥谷邦夫教授（東方学研究部）は、文部省科学研究費補助金により、十月五日大阪発、四川大学に於いて洪雅県瓦屋山一帯の実地調査、香港道教寺院等に於いて道教関係資料調査を行い、十月十六日帰国。
。小南一郎教授（東方学研究部）は、十月十九日大阪発、プリンストン大学に於いて“Text and Ritual in Early China”に関する研究会に出席し発表して、十月二四日帰国。
。高田時雄教授（東方学研究部）は、在外研究員旅費により、十月三一日大阪発、台湾中央研究院資訊研究所・近代史研究所、中華仏学研究所に於いて東洋学文献類目入力フォーマット開発についての研究打合せを行い、十一月四日帰国。
。森時彦教授（東方学研究部）は、在外研究員旅費により、十月三一日大阪発、

台湾中央研究院資訊研究所・近代史研究所、中華仏学研究所に於いて東洋学文献類目入力フォーマット開発についての研究打合せを行い、十一月四日帰国。

○安岡孝一助教授（東方学研究部）は、在外研究員旅費により、十月三一日大阪発、台湾中央研究院資訊研究所・近代史研究所、中華仏学研究所に於いて東洋学文献類目入力フォーマット開発についての研究打合せを行い、十一月四日帰国。

○岡村秀典助教授（東方学研究部）は、文部省科学研究費補助金により、十一月一日大阪発、北京大学に於いて中国古代玉器の調査と研究を行い、十一月七日帰国。

○北垣徹助手（人文学研究部）は、一九九九年十一月十七日大阪発、社会科学高等研究院レイモン・アロン政治研究センター（フランス）、フランス国立図書館に於いて第三共和政初期の共和思想と道徳科学の関係についての研究を行い、十一月十六日帰国。

○小南一郎教授（東方学研究部）は、十一月十五日大阪発、台湾中央研究院文学哲学研究所に於いて「空間、地域と文化—中国文学と文化書写」学術検討会に出席し発表して、十一月十九日帰国。

○竹沢泰子助教授（人文学研究部）は、文部省科学研究費補助金により、十一月十三日成田発、カリフォルニア大学バークレー校に於いて社会進化論に関する資料収集、サンフランシスコヒルトンホテルに於いて国際人類学民族学会議の打合せを行い、十一月二十日帰国。

○曽布川寛教授（東方学研究部）は、十一月十八日大阪発、青島市博物館、青州市博物館、山東省博物館、兵馬俑博物館、南京博物館、上海博物館に於いて中国美術の調査及び資料蒐集を行い、十一月三十日帰国。

○金文京教授（東方学研究部）は、文部省科学研究費補助金により、十一月二八日大阪発、ソウル大学奎章閣文庫及び総合図書館、慶北大学図書館に於いて中国近世小説資料の調査を行い、十二月三日帰国。

○真下裕之助手（東方学研究部）は、文部省科学研究費補助金により、十一月二八日大阪発、大英図書館に於いてチャガタイ・トルコ語、ペルシア語文献の諸写本研究を行い、十二月八日帰国。

○冨谷至教授（東方学研究部）は、十二月七日大阪発、韓国・忠北大学校に於いて特別講演会講演、慶北大学に於いて「中国史における法と習慣」に関する発表を行い、十二月十日帰国。

○山本有造教授（人文学研究部）は、十二月五日大阪発、台湾中央研究院近代史研究所、台中省文献委員会、台湾市立図書館、高雄市歴史博物館、阿美文化村に於いて講演及び植民地期台湾に関する資料調査を行い、十二月十四日帰国。

○山室信一教授（人文学研究部）は、十二月五日大阪発、台湾中央研究院、台中省文献委員会、台湾市立図書館、高雄市歴史博物館、阿美文化村に於いて講演及び国民帝国・日本の法的構成に関する史料調査を行い、十二月十四日帰国。

○小山哲助教授（人文学研究部）は、文

部省科学研究費補助金により、十二月三日大阪発、ワルシャワ国立図書館に於いて貴族共和制期ポーランドにおける国制改革論の系譜に関する資料調査を行い、十二月十六日帰国。

◦富永茂樹教授（人文学研究部）は、文部省科学研究費補助金により、十二月七日大阪発、社会科学高等研究院（フランス）に於いて「民主政の理論と実践」に関するセミナー出席及び資料収集を行い、十二月十七日帰国。

◦高田時雄教授（東方学研究部）は、文部省科学研究費補助金により、十二月十二日大阪発、ローマ大学、ローマ国立中央図書館に於いて南欧所在中国学資料の調査研究を行い、十二月二十日帰国。

◦金文京教授（東方学研究部）は、十二月十四日大阪発、ソウル・高麗大学に於いて第一回韓国学ワークショップに出席、高麗大学図書館に於いて元史関係資料収集、誠庵古書博物館に於いて仏教関係資料調査を行い、十二月二十日帰国。

外国人研究員

◦Staffan Rosen　ストックホルム大学教授
シルクロードにおける日本と韓国
（文化生成研究客員部門）
受入教官　冨谷教授
期間　二月五日～八月三一日

◦張　啓雄　中央研究院近代史研究所研究員
十九世紀後半における東アジア国際秩序
（文化連関研究客員部門）
受入教官　籠谷助教授
期間　五月十五日～八月二十日

◦Louise Young　ニューヨーク大学歴史学部助教授
満州国における日本人の文化活動
（文化連関研究客員部門）
受入教官　山室教授
期間　九月一日～十一月三十日

◦Marcel Henaff　カリフォルニア大学サン・ディエゴ校教授
都市および公共空間の比較史
（文化生成研究客員部門）
受入教官　富永教授
期間　十月二三日～二〇〇一年六月三十日

招聘外国人学者

◦John Allen Tucker　ノース・フロリダ大学歴史・哲学宗教学部準教授
荻生徂徠『辨名』の研究
受入教官　横山教授
期間　一月十二日～七月二十日

◦何　双全　甘粛省文物考古研究所研究員教授
辺境出土木簡の研究
受入教官　冨谷教授
期間　二月二五日～十二月二四日

◦Giovanni Verardi　ナポリ東洋大学アジア学部教授
インド・中央アジアにおける佛教衰退に関する歴史考古的研究
受入教官　桒山教授
期間　三月一日～三月三十日

◦James Moore Oliver　オランダライデン大学中国学研究所講師
唐代科挙制度の研究
受入教官　冨谷教授

期間　三月二五日～四月三十日

。Gillian Gaye Rowley　ウェールズ大学日本研究センター元講師現在著述業

中院仲子の伝記的研究

受入教官　横山教授

期間　四月一日～

二〇〇一年三月三一日

。Antony Best　ロンドン大学国際関係史学部講師

アジア太平洋戦争の起源についての研究

受入教官　籠谷助教授

期間　五月一日～六月三十日

。Thomas James Harper　ロンドン大学東洋アフリカ学院上級研究院

赤穂浪士在京関連資料の調査

受入教官　横山教授

期間　五月一日～

二〇〇一年三月三一日

。Jean Rault　ルーアン美術学校教授

庭園様式の日仏比較研究及び写真撮影

受入教官　富永教授

期間　七月十一日～九月三十日

。Harvie Ferguson　グラスゴー大学助教授

近代人の自己理解と心理学の展開の研究

受入教官　富永教授

期間　九月一日～九月二五日

。文　竣暎　ソウル大学校「21世紀の世界の中の韓国法の発展」教育研究団助教

植民地期朝鮮の刑事政策に関する研究

受入教官　水野教授

期間　九月二十日～

二〇〇一年九月十九日

。李　鍾旼　延世大学校社会発展研究所専門研究員

朝鮮総督府の犯罪統制に関する研究

受入教官　水野教授

期間　十二月二五日～

二〇〇一年十二月二四日

外国人研究生

。Sonya Lee

東アジアにおける仏教寺院の美術と歴史

受入教官　曾布川教授

期間　十月一日～

二〇〇一年九月三十日

漢字情報研究センター講習会

。二〇〇〇年度漢籍担当職員講習会（漢籍電算処理）

第一日（十月二日）

図書館と情報システム（講演）

大型計算機センター教授　金澤正憲

NACSIS-CAT 総合目録と中国書目録（講義）

国立情報学研究所教授　宮澤　彰

第二日（十月三日）

WWWによる情報サービス（講義）

大型計算機センター助教授　沢田篤史

Windows 上での簡単な Web ページ作成（講義・実習）

大型計算機センター助手　岩下武史

Web ページ作成（実習）

第三日（十月四日）

最近のデータベースの動向（講義）

大型計算機センター助手　川原　稔

東洋学文献類目とCHINA3（講義・実習）　村田康彦

データベース検索（実習）

第四日（十月五日）

日中台の文字コード（講義）　安岡孝一

文字と文字コード（講義・実習）　守岡知彦

テキストデータ処理（実習）

第五日（十月六日）

TCP／IPとインターネット（講義）　大型計算機センター助手　江原康生

漢字と情報システム（講演）　武田時昌

。二〇〇〇年度漢籍担当職員講習会（中級）

第一日（十一月六日）

漢籍について（講演）　花園大学教授　吉川忠夫

美術書について（講義）　曾布川寛

第二日（十一月七日）

歴史書（古代）について（講演）　小南一郎

通俗書について（講義）　総合人間学部助教授　赤松紀彦

第三日（十一月八日）

小学書について（講義）　高田時雄

蔵書家について（講義）　名古屋大学文学研究科教授　井上　進

第四日（十一月九日）

仏教書について（講義）　船山　徹

中国近代の印刷出版について（講義）　京都府立大学文学部助教授　小松　謙

第五日（十一月十日）

中国近・現代の文芸雑誌について（講義）　神戸大学文学部助教授　濱田麻矢

お客さま

十月十七日　中央研究院中山人文社会科学研究所研究員　劉　石吉　厦門大学歴史系主任　陳　支平（岩井が応接した）

十二月五日　中華日本学会日本研究刊行物編集者訪日代表団（狭間、森、水野、高嶋が応接した）

十二月六日　江蘇省社会科学院訪日団（狭間、森が応接した）

十二月十九日　フランス国立科学研究センター（CNRS）東アジア研究所研究員　Jerome Bourgon（岩井が応接した）

人文研の〝たからもの〟

田中峰雄文庫

――中世フランス大学史関係文献――

小山　哲

かつて本研究所の助手をつとめられた故田中峰雄氏の蔵書の寄贈を受けて四年ほど前につくられた、比較的新しい文庫である。中世フランスの大学史を中心に、ヨーロッパ中世史にかんする洋書七九三タイトル、九四七冊からなる。

人文研のヨーロッパ関係の蔵書の重要な柱のひとつはフランス書であるが、まとまったコレクションとしては、これまで「サン＝シモン、フーリエ文庫」、桑原武夫・河野健二両氏の旧蔵書など、近代以降にかんする文献がその中心を占めてきた。その意味では、「田中峰雄文庫」が加わることによって、本研究所のフランス関係の蔵書は、対象とする時代の幅を大きく広げたことになる。

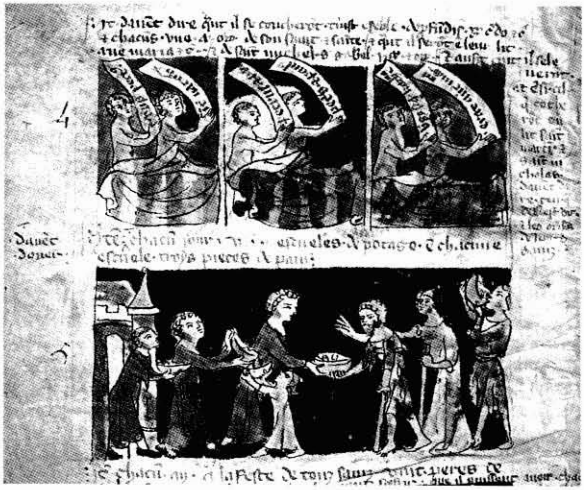
「十二世紀ルネサンス」を代表する思想家のひとり、ソールズベリのヨハネスの研究からはじまって、一九八三年に社会科学高等研究院に提出された中世パリ大学にかんする学位論文 *La nation anglo-allemande de l'Université de Paris à la fin du Moyen Age*（一九九〇年刊）にいたるまで、田中峰雄氏の関心は一貫して中世ヨーロッパにおける「知」の世界に向けられてきた。とくに史料の緻密な読解と操作にもとづいたパリ大学史の研究は、ジャック・ル・ゴフをはじめとするフランスの中世史家たちに高く評価された。その成果は、一九九三年に氏が不慮の事故で早世されたのちに編まれた論文集『知の運動』（ミネルヴァ書房、一九九五年刊）にも盛り込まれている。田中文庫には、これらの研究の土台となった刊行史料や研究書が数多く含まれている。現在、田中文庫の本は分類番号順に他の書籍のなかに混ぜて配架されているが、その全容は目録によってつかむことができる。

利用する側からみて、個人の名を冠した文庫に期待するものはなんだろうか。ひとつは、その研究者の専門分野にかんする文献をまとまった形でみることができる、ということであろう。基礎的な史料や古典的な研究書が揃っているのだから、同じ分野を研究しようとする者にとってはありがたいことである。もっとも、あまり収集が完璧だと、利用者はその文庫の枠にとらわれてしまい、かえって独自の道を切り拓くのに苦労

するかもしれない（これは、近世ポーランド史を専門とする――したがって田中文庫のような先学の充実した蔵書の恩恵に与ることはほとんど期待できない――筆者の、多分にやっかみも混じった想像である）。

もうひとつ、個人が残したコレクションの魅力は、そのひとの研究の舞台裏や書物との接し方を垣間見ることができることであろう。田中文庫の大学史関係の本にはところどころ鉛筆による下線や欄外の書き込みがあり、故人の勉強の跡をたどることができる。本の裏表紙には購入した書店の名と日付が記されていて、持ち主と書物との出会いの風景が思い浮かぶようである。

田中文庫が対象とする中世ヨーロッパの「知」の世界は、一見、私たちの日常からは遠いようにもみえる。しかし、今日の大学教育のシステムに不可欠の「学位」や「カリキュラム」は、十二世紀から十三世紀にかけて、ヨーロッパの大学で成立したのである。目下、市場の論理に直面して揺れている大学という制度の原点を見つめ直すためにも、故人が遺した研究成果と蔵書は、私たちにとってたいせつな〝たからもの〟である。



中世パリ大学の学生生活から。上段：朝夕の祈り。下段：貧しい人びとにパンとスープをふるまう。出典：*La vie universitaire parisienne au XIIIe siècle*, Paris 1974（田中峰雄文庫所蔵）

共同研究「帝国の研究」参加記

秋田　茂

一九九八年度から二〇〇〇年度までの三年間、山本有造教授が組織された「帝国の研究」班に、併任の非常勤講師として参加する機会を得た。

この研究会は、最初は、帝国に関する内外の研究史を概観する、二年間の勉強会のつもりで始まったと理解していた。山本教授が以前組織された「大東亜共栄圏の研究」を拡大・進化させるための予備的考察として位置づけられていた。イギリス帝国史研究の領域で何が問題になっているのか、欧米の最先端の研究はどういう状況なのか、主に研究史をフォローして、日本経済史の専門家に紹介するのが主な目的であったので、気安く参加した。

メンバー約十名は、イギリス史、日本経済史、アジア史の専門家の混成チームであり、最初の一年間は、お互いが何をどいう視角から研究しているのか、ハラを探りながら緩やかに進んでいった。ただ、山本班長からは、この研究会では主に理論（理屈）を問題にするのであり、個別具体的で実証的な史料や事実を論議するのではない、と毎回繰り返し「警告」を受けた。ともすれば、事実と史料に埋もれがちの私には、これはかなりのプレッシャーになった。

二年目になると、共同研究の全体像と分担が明らかになってきた。この共同研究は、帝国の「原理、類型、関係」という三つの部分から構成されている。「帝国の原理」に関わるのが、山本班長、神戸大学の王柯さん、人文研の安田さん、「帝国の類型」を問題にするのが、京大文学部の杉山さん、大阪経済大学の山本さん、人文研の山室さん、「帝国の関係性」を論じるのが、阪大の杉原さん、人文研の籠谷さん、そして私である。扱う帝国も、前近代から現代の旧ソ連まで、関連する地域は、ユーラシア大陸全体と近代のヨーロッパ海洋帝国を含む、文字通りの世界全域におよぶ。結果的に、帝国を通じた、グローバルヒストリーの構築につながるような雄大なプロジェクトになった。

五〇回を超える研究会での議論は、毎回フォローするのが精一杯であったが、終了後のビールを飲みながらの歓談も含めて、得るモノは多かった。柔軟な発想と、大胆な構想力が求められ、共同研究ならではの刺激とプレッシャーに満ちた三年間であった。成果は、いずれ論集として出版される予定である。外国人研究

者や、日本人ゲストスピーカーとも議論する機会を与えていただき、山本班長に本当に感謝している。今後、三年間の共同研究で芽生えたチームワークと人間関係を大切にしていきたいと思う。

（大阪外国語大学助教授）

南インドのヴェーダ写本研究班 覚え書き

井狩彌介

古典研究に携わる場合には、扱う文献の第一次資料がどのようなかたちでテクストを提示しているかについての目配りは欠かすことができない。ただし、テクストの伝承が長期間に亘って継承され、またその伝播が広範囲な地域に及ぶ場合には、現存資料から当該テクストの原形を探り、またその伝承過程で生じた変容を跡付ける試みは必ずしも容易ではない。信頼しうる歴史資料の少ないインドの場合には特に研究を進めることの困難さに悩まされるのである。

研究班で扱ってきたヴェーダ文献の写本伝承を考える場合、インド文化のさまざまな側面への考察がいつもそうであるように、インド文明のなかの複合文化の問題、すなわち多言語・多文化の共存とそれらの多文化間のダイナミックな相互影響の歴史的な展開を視野に入れておかねばならない。写本研究の場合、書かれているヴェーダ・サンスクリット語は古典語のサンスクリットよりも古層の言語であるが、これが聖典として各地に伝承されてゆく過程で、それぞれの伝承地域で異なった諸言語の発音と表記法で記録されるところに問題が発生するのである。

この研究では、問題が複雑になるのを避けるために、南インドで作成される写本伝承を中心とし、そのなかでも特に現在のケーララ州地域で見出される写本群に焦点をあてた。ちょうど、この研究の進行中に、南インドの写本研究では経験豊かなアスコ・パルポラさん（ヘルシンキ大学）が客員教官として人文研に来られて共同研究に加わってくれたことは大きなメリットだった。彼と人文研の藤井さんが現地で発掘してきたサーマヴェーダのジャイミニーヤ派の資料と、わたしがこの10年来に蒐集してきたヤジュルヴェーダのヴァードゥーラ派の新資料の情報とを合わせると、これまでほとんど信頼に足る研究が無かったこの分野の研

究基礎データを総合的に提示することが出来るだろうというのが当初の見通しだった。特にヴァードゥーラ派の諸写本はこれまで指摘されることのなかった写本の新旧に関する新情報を提供することができる。パルポラさんも共同研究に積極的に参加され、その後その他の欧米の研究者とのネットワークが拡大し、情報交換の幅が広がることとなった。

ヴェーダ伝承はもともと北インドの平原地域で核部分が形成され、次第にインド亜大陸の各地に広がっていった。その結果、さまざまな歴史的屈折を経て、ヴェーダ伝承の中心にあったアーリア人から見れば辺境だった筈の南インドなどに、伝承の古層に属する諸学派の伝承が保持されている。ヴェーダ文献の歴史は、実質的にはヴェーダ伝承を担った多くの祭式学派の地理的な移動と相互間の接触と影響の歴史としてみることができる。約二五〇〇年前にその故地である北インドから移動を始めたある祭式学派が、最終的に現在に確認される分布地域に定着するに至る経過を跡付けることが、その学派の伝承テクストの歴史的な変化を確定するための基礎作業となる。たとえば、確認されているあるヴェーダ学派の例では、現存写本の伝播の過程で、北インドのカシミールから西インドのグジャラート、東南インドのオリッサへというテクスト伝承の伝播が知られている。一般にヴェーダ文献の伝承は、厳格な聖典尊重の視点からきわめて正確に行われてきたが、それでも伝播の過程で誤伝は生じうる。この誤伝のほとんどは、言語事情に基づくものである。インド中世期には、亜大陸各地における政治・社会の分立を背景に、多言語状況が作り出されていた。インド最古のヴェーダ文献のサンスクリットはかなり古くから古典語として扱われるが、基本的にはそれが伝播した地域の日常語の文字で記され、その言語体系の発音の影響のもとに伝承される。したがって、異なった言語地域にヴェーダ伝承が伝播する場合に、発音と文字の両面から誤伝が生じる場合がある。連綿とした口頭伝承が現存する場合も異言語地域間でのテクストの伝播は伝承者の世代が交代する場合に誤伝が生じることが多い。

この種の研究が学界でまだ十分に熟していない研究段階の現状では、今後の研究展開の基礎となるような正確な資料提示と問題点の整理を中心とした報告を優先することとなった。目下、ケーララ地域のヴェーダ写本の相対的な年代層位の確定と、他地域のヴェーダ写本に見られない特殊なサンスクリットの正書法と実際の発音との関係、またその正書法の発展過程に焦点をあてて報告を準備中である。

検索と出典さがし

船山　徹

三教交渉の研究班で会読をすすめているのは唐の神清の撰『北山録』十巻。その文体にはなんとも妙なところあり、先行文献の文章を殆どそのまま引き写して自らの文とするようなこともまま見られる。人のフンドシで相撲を取るばかりか、フンドシを次から次へと取り替えるその手口に独自の妙味があるようなものだ。読み手である我々は、もとづく資料を同定するため漢文仏典の渉猟を余儀なくされる。その関連で最近個人的に面白いと思ったのは、些細な事といえばそれまでだが、唐代の仏教説話集として知られる『釈門自鏡録』と本書の関係である。本書の成立は八世紀末か九世紀初め頃。一方『釈門自鏡録』の編纂年代は諸説あるが、近年の研究によれば八世紀初め頃という。つまり恐らくは『釈門自鏡録』が先、『北山録』が後なのであって、その両者だけにみられる話や、ある話から別な話に移る順序（フンドシの取り替え方）が一致する事例が数カ所あるのだ。普通にアタリをつけて出典調べするなら、『北山録』の典拠として『釈門自鏡録』をひもとく者は多くあるまい――『釈門自鏡録』は殆ど他の伝記を抜粋しただけの書物なのだから。白状すると、注目のきっかけとなったのはパソコン検索であった。闇雲な検索にも時としてメリットはあるものだ。

話は飛ぶけれども、パソコン依存度の年ごとの増大は漢文仏典を読む者にもあてはまる。インド学チベット学の方では、データ入力や検索は十年程前から行なわれている。サンスクリットやチベット語は表意文字であり、研究上欧米との関係が緊密なこともあって、キーボードになじむのである。またこう言うと語弊もあろうが、日本のインド学は大半を仏教学者が占め、その多くが寺の出身であり、坊主にはメカ好き、新しもの好き、そして金のかかること好きが多い。この点からもインド学における速やかなる電子化は三段論法風に言える。他方、漢文仏典の場合はどうかといえば、少し様子が違って、昨年二〇〇〇年あたりが、一部専門家を除く一般の末端ユーザ研究者の間で漢文仏典の語句検索が普及し始めた年だったのではないか。さて、電子テキストが良くも悪くも使いかた次第なのは言うまでもない。研究の量や作業の速度はともかく、コンピュータの使用自体が研究に質的向上をもたらすわけではない。今も昔も事態は本質的には変わっていない

し、今後も変わらないだろう。大切なのは普段の読書、それだけだ。しかしである。本を何度もひっくり返し、時には寄り道して思いがけない資料に出会ったりしながら、やっと典拠がわかったときの喜びと小さな達成感、効率の悪さがもたらす豊かさ――それにひきかえ検索をかけて出典を知ったときのあっけなさといったら！　肉体感覚の欠如した知識とでも言おうか。もし失うものがあるとしたら、その損失、すこし大きすぎることはないだろうか。

「図像学」の研究

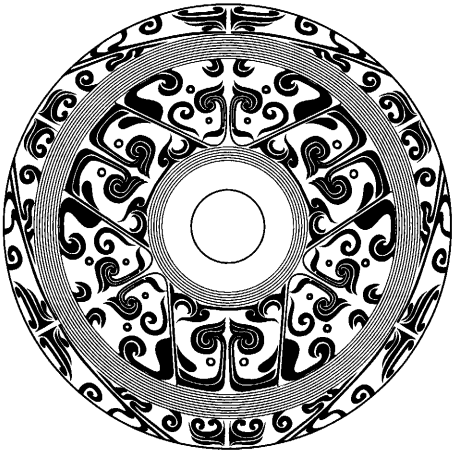
大原嘉豊

中国美術の図像学研究班は、発足したばかりの研究班である。着任したばかりの私も早速事務方を勤めることになった。その一方で、班員として研究報告もせねばならない。そこで、研究班のテーマが引っかかってくる。

図像学は、美術史学草創期の、エミール・マールによる西洋キリスト教美術研究に源を発する。彼は、その造形の意味を読みとる解釈学を基礎に、作品を連ねることで、一二世紀から一八世紀に及ぶ壮大なキリスト教の歴史そのものを浮かび上がらせた。その成果は4大部の著作に結実している。学生時代、彼自身の編纂による抄録本を岩波文庫で読んで深く感動した記憶がある。最近、国書刊行会から原本の翻訳がやっと刊行され、早速入手した（まだ読んでないが……）。彼の業績が成功したのは、その素材の良さにもある。様々な説話に彩られた宗教美術は図像学に最も相性のよいものであり、私の専門の仏教美術に関しても、勝れた業績が多く残されている。が、だからといって、やれと言われてなかなか出来るものではない。班員の皆さんが研究発表に際してテーマと折り合いをつけようと苦慮されているのは、宜なることと思う。方法論などというものは、あくまで手段であって、強い動機・目的がなければ研究自体が成立しない。

考えた末、昨年の調査以降気になっていた藤田美術館の伝李公麟筆九歌図を取り上げた。その詳細には触れないが、原本をコピーするという行為の中での写し崩れや変更が、その時代の価値観を反映し、それらの氾濫が李公麟の真の様式実態を歪める一方で、逆にそ

の故に移りゆく時代の嗜好に適合し、彼の名声を拡大再生産していったという点に、興味を感じた。この美術作品のコピーという行為は、そのオリジナルの図像型式自体に価値が認められて初めて存在する。こうした直接的なコピーでなくても、西洋絵画にギリシア彫刻の姿がパラフレーズされて使用される如く、意味内容を一旦措いて、図像型式が一種の造形言語として受け継がれていく歴史を扱うのも、興味深い。美術史は、作品誕生の瞬間の5W1Hの解明に目を奪われ、完成後の受容・解釈の変化が手薄になりがちである。著録類を読みながら、李公麟に対して、彼らが思い描いた様式イメージと、あの傑出した五馬図によって現在の私達が抱くそれとがどの位一致するか、深淵を覗き込むような思いに囚われた。「図像学」という方法的課題に、色々考えさせられる一年であった。



龍の尾は曲るか

——大明宮含元殿遺址保存事業のこと——

田中　淡

含元殿は、唐の長安城大明宮の正衙で、文革直後の展覧会で展示された著名な建築史家F先生の彩色復元パースに描かれた高壮な基壇前面に真っ直ぐに延びる三本の龍尾道の偉容はまだ記憶に新しい。この復元案は、五九—六〇年に行われた発掘調査の結果にもとづいて文革後の七三年、雑誌論文として公表された。しかし、土をつき固めた基壇の残骸は風化損傷が甚だしく、そのまま放置すれば早晩貴重な遺跡を崩壊に至らしめることは明白だった。

現在実施中の遺跡保存修復事業は、日本政府がユネスコに提供した信託基金の援助によって、一九九四年に日中共同事業協力委員会のもとで基本方針が決定、以来、日中の専門家会議で協議が重ねられてきた。その間すでに六年以上の歳月が過ぎ去り、当初双方十名ずつという約束で発足した同会議の専門委員は、日本側は私も含めて不変だが、中国側は何の断りもなく新委員が加わり人数も倍増、いつの間にやら顔触れは毎回随便的に変容するのが通例となった。もっとも国の流儀だけではない経緯がある。何よりもまず、六〇年の発掘は基壇本体に限られ、前面部分は局部探査により龍尾道の形状を推定したにすぎないため、本格的な調査の必要があった。九五—九六年、中国社会科学院考古研究所による再調査が行われ、東西両閣の基壇側壁にとり付いて上る龍尾道の遺構が検出された。平城宮第一次太極殿に共通する屈曲して上る形のものが創建以後のある時期に築かれたことが判明したのだ。

この新発現遺構の知見にもとづく新たな復元案が九七年の雑誌論文に、F氏と並ぶ著名な建築史家で人文研にもなじみ深いY先生によって、発表された。Y氏の呈示した復元図は、すでにユネスコによる保存事業マスタープランを説明するイメージ図として公表されている。日本側委員が支持するこの屈曲形の龍尾道整備案は、しかしながら、中国の考古学界や国家・地方の関係部局の思惑などもあって、いまだ合意、最終的結論に達するに至らず、何回専門家会議を重ねてもほとんど徒労と思えるほどだ。

第一期修復工事は、こうして何と龍尾道の先端の形状について決着を保留したまま着工された。たんに学術的見解の相違という類いではない。事情は著しく複雑だ。もはや紙数が尽き、これ以上書けないのを幸いとすべきだろう。小文を書き了えると間もなく、私は

北京で最終局面の会議に臨む。これが印刷されるころは、果たして龍の尾は曲るのか、延びるのか。それとも、考えたくないことだが、会議の決着が依然として延びているのだろうか。

戎肆庵読裘記序

浅原達郎

戎肆庵とは、一九九五年一月一七日未明まで神戸に存在したわが家のことである。いまはその実はなく、たわむれに与えたその名のみが、わたしにとっての兵庫県南部地震のすべてを語るものとして残った。

震災で命を落とされたかたがたへの慰霊と、わたしたちを救ってくださったかたがたへの感謝との思いを表わすために、わたしのできることといえば、自分のつたない研究につとめるよりほかにない。ところが、しばらく学問を顧みるいとまのない日日が続いたあと、いざ研究を再開しようとしても、停止してしまった機関車をもう一度動かし始めるような重苦しさを感じるばかりで、そう簡単にはもとの状態に戻れないと思った。

裘錫圭氏に初めてお目にかかったのは、震災直後の二月六日のことである。北白川の分館を訪問された裘氏とのまったく偶然の出会いであり、わたしは、神戸で貴重品を掘り出すために借りたのこぎりを、分館の収蔵庫へ返しにきたところであった。尊敬する中国古文字学の大英雄に会うことができたというのに、学問について語るゆとりなど当時のわたしにはなく、いただいた一冊の『裘錫圭自選集』だけが手もとに残った。ただそのときそれが研究の道を示すたったひとつの明りのようにわたしには思えて、裘氏の論文を一篇一篇ていねいに読んでいくところから勉強をやり直すことにした。さいわい、古文字学を志しておられた同僚の森賀一恵さんがおつきあいくださって、その後いつとはなしに「読裘会」と呼ぶようになる勉強会が、ひっそりと始まったのである。

一九九五年にはついにわたしは何も書けなかったが、翌年以後、公表できなくてもよいから自分で納得のいくものを一年に一篇ずつという目標をたて、昨年までに五篇を書くことができた。機関車はきわめてゆっくりとであるがたしかに動いているようだ。五篇のうち三篇が直接に裘氏の論文を手がかりとした「戎肆庵読

裘記之一・二・三」であるほか、他の二篇も裘氏の研究と少なからず関わるもので、すべて「読裘会」の成果といってよい。当初は公表するつもりなどなかったが、機会を得て雑誌に掲載されたもの、あるいはその許可をいただいたものもあり、最近の二篇はもともとその予定があって書かれた。ただ最初の一篇「戎肆庵読裘記之一」にのみ、いまに至るまでその機会の訪れる気配のないのが、わたしの慰霊と感謝の思いがどこかに通じてそこに捧げられたということなのであれば、まことにありがたいことである。

本当は内緒にしておきたい密かな楽しみ

矢木　毅

人にはそれぞれにパラダイスがあり、オアシスがある。人文研の助手という身分は、駆け出しの研究者にとっては、まさにパラダイスのような境遇にちがいないが、私はその本務先である研究所（分館）とは別に、密かにある処をオアシスと定めて足繁くそこに通っていた。

週に一度、西宮での非常勤の講義を終えた私は、まず大阪駅前第三ビル地下二階の「はがくれ」で讃岐うどんを食し、おなかの虫を養ったところで、おもむろに御堂筋を逍遙し、やがてお目当ての府立中之島図書館・古典籍資料室の静謐の中へと足を踏み入れていく。いまさら私ごときが紹介の労を取るまでもないが、そこには佐藤六石氏旧蔵の、わが国屈指の韓本コレクションがあり、私たちはこれを公共図書館に特有の気安さによって、資格を問われることなく自由に閲覧することが許されているのである。

閲覧の手続きを済ませ、お目当ての韓本を手にした私のその後の行動については、実のところ、ここにはあまり書き記したくなかった。

ひとしきり韓紙の手触りを楽しみ、内容に目を通した私は、閲覧カウンターに赴いて文献の複写を申請する。ここでも申請はすんなりと受理されるが、そこは痛み易い線装本のことであるから、司書の方はブック式複写機（本が痛まないように上から撮影する機械）で複写すべき旨の指示を出されるのだが、いざ、別室の複写カウンターに本を持って行くと、複写業務を請け負う大阪発明協会の皆さんは、無造作に本をひっくり返し、ガラス面に本を押し当てて、実にてきぱきと

コピーを取っていって下さるのである。

綴じ糸が切れたりしたらどうしよう――そんな私の心配を他所に、コピーはたちまちに仕上がっていく。なにがしかのお金を支払ってこれを受け取った私は、原本の返却手続きを済ませると、すこし困ったような、でもやっぱり嬉しいような、複雑な思いを胸に帰途につくのであるが、そうして手にした朝鮮人の文集などを、赤鉛筆片手にぽちぽち句読を切って読み進めていくひとときが、やはり私にとってはなによりの楽しみである。

この冊子が出版されるころ、私はすでに京都を離れて宮崎に転出していることであろう。人文研を離れることは寂しくはないが、中之島が遠くなるのはやはりすこし残念なような気もする。

「世紀」と「センチュリー」

小林博行

新しい世紀を迎えた日。ふとしたことから、わが思いつきに心躍らせることがあった。

たいそうなことではないから先に言ってしまおう。「世紀」の「せ」は「センチュリー」の「セ」ではあるまいかというのだ。

人文研の助手に採用されてから私は、これもちょっとした出来事からだったが、鳥の鳴き声を意味のある言葉に写し取る、いわゆる「聞きなし」に興味をもつようになった。ウグイスの声を「法、法華経」といったり、ホトトギスのそれを「特許許可局」といったりするのがそれだ。古今東西の聞きなしを集めたり、聞きなしについて書かれた文章を読んだりするなかで、言葉のもつ音の側面の大きさについて、改めて感心したりしていた。

「世紀」と「センチュリー」の思いつきも、そうしたことがあったからだろう。もちろん明治の翻訳者が、「センチュリー」を「せいき」と聞きなしたといいたいわけではない。明治十年代の「センチュリー」の翻訳事情については、折よく溝口雄三氏が、岩波書店『図書』二〇〇一年一月号に「『世紀』余話」と題して書いておられる。これによれば、「世紀」が使われるのはおそらく明治十四年（一八八一）以降のこと。そのころほかに、中村正直はたとえば「第十八回百年」といい、中江兆民は「十九紀」のように記し、また

「世紀」を初めて使ったらしい松島剛でさえ、ときに「百紀」と書いているという。その後、明治十年代の末までに「世紀」は定着してゆくが、正直や兆民はしばらくは自分の訳語を使いつづけた。その理由を溝口氏は、訳語についての彼らの「自負」と、「漢学の素養」とに求めている。

溝口氏も書いているように、中国には上古以来の帝王の事跡を記録した本に、晋の皇甫謐『帝王世紀』がある。辞書をあたってみると、「世」はもと三十年を意味し、後に世代・治世の意に転じたらしく、百年という意はどこからも出てこない。なぜ松島剛が「世紀」という語を使い、徳富蘇峰や福沢諭吉がそれに追随したか。これについてはいまだ明確でないようだ。もっとも「センチュリー」の「セ」をとったのではないかという私の思いつきも、いったいどこをどう確かめたらいいものやら。

ところでこの思いつき、「ミレニアム」の訳語を考えていて出てきたのだった。「千年紀」と訳される場合もあるが、もうひとつ字を減らせないものか。明治の諸訳語を知ったいま、「千紀」もわるくないとは思う。しかし「センチュリー」が「世紀」なら、「ミレニアム」から「ミ」をとってはどうだろう。問題はどの字をあてるかだ。「未紀」「魅紀」「実紀」……。いっそ「レ」をとって、「令紀」「齢紀」「練紀」……。どうもよろしくないようだ。新春の妄説の検討とともに、これも千年後の識者に委ねることにしよう。

明治洋画の魅力

高階　絵里加

二〇〇〇年の末に、博士論文をまとめた著書を上梓した。表紙には、論文発表のときからお世話になっている三好企画の三好寛佳氏のご提案もあり、これまでの研究の中でもっとも私の想像力を刺激した二つの作品である山本芳翠の《浦島》と黒田清輝の《智・感・情》を組み合せて使うことにした。いまのところ、この表紙に対する反応は極端に分かれている。「美しい装丁」「大好きな《浦島》が表紙で嬉しかった」といった好意的なものも多かった一方で、1月28日の朝日新聞書評欄では「なんとも不気味」とも評されている。《浦島》そのものについていえば、博士論文を提出したときに先生方の一人から「なぜこんな下品で変な絵

を扱ったのか」とのご質問があり、返事に窮したこともあった。けれども、ある人々にとっては気味が悪く「和洋折衷」に過ぎない明治の絵画は、私には魅力つきない研究対象なのである。

明治期の洋画には、意外にも、日本の神話や御伽噺が重要な位置を占めている。もちろん、このような画題は近世以前の絵巻物や屏風にもとりあげられてはいたが、西洋との出会いの結果、物語絵画の表現は本質的な変容を迫られることになった。

もともと日本の洋画は迫真的な現実再現（風景・肖像・静物）のジャンルにおいてその威力を発揮してきたが、日本にはなかった西洋の「歴史画」概念の導入に伴って、想像力と構想力を必要とする虚構の世界の構築が試みられるようになる。油絵具を用いることによる技法表現の問題、神話・歴史・伝説の中からどのような物語を選ぶかという主題選択の問題、それまで多くの場合いくつもの場面から成っていたある物語をたった一枚の油絵にいかに表現するかという構想の問題などは、それ以前の日本絵画にはなかった新しい課題となった。日本の洋画家たちは西洋との「強制された」出会いによって、これらの困難な課題に取り組み、その結果、日本的主題の絵画は大きく変化せざるを得なかった。明治十年代頃からあらわれる〈竹取〉〈羽衣〉〈浦島〉〈日本武尊〉〈平家物語〉などの「和」の主題の変容の特色と本質は何であったのか、また、《浦島》のような絵画は黒田清輝の帰国をきっかけとする白馬会の抬頭の後、明治三十年代には一掃され消えてしまったかに見えるが、はたして実際にそうであったのか、このような問題を、これからしばらくは探ってゆきたいと思う。

東京国立博物館での史料整理

高木博志

東京国立博物館資料部には、明治維新以来第二次世界大戦後までの、近代の事務書類が残されている。

近代の博物館は、一八七三年に昌平校の跡地に発足し、一八八九年に宮内省管轄の東京・京都・奈良三帝国博物館が設立される。一九〇〇年に帝室博物館となり、皇室の保護する文化財という位置づけが明確になる。戦後は、宮内省から文化庁へとその管轄をかえ、国民の文化財を展示する博物館となった。

私は、一九八〇年代から何度も、『東京国立博物館百年史』（一九七三年、第一法規出版）に引用されている、東京国立博物館内部の事務書類を見せてもらえないかと働きかけてきた。が、なかなかガードは堅かった。かつて宮内省の管轄にあった旧帝室博物館は、情報公開が遅れていた。しかし近年になって、内部の学芸員の方々が、未整理の膨大な事務書類を整理し公開したいという意向をもたれ、私も一九九五年から六年あまり整理に参加してきた。

この間、整理し公開された文書は、簿冊の形態を中心に二千件をこえる。

いくつか興味深い文書を紹介したい。博物館収蔵品の由来がわかる一八二冊の『列品録』がある。また全国の宝物調査の記録が、壬申（明治五年）、明治十年代、一八八九年以降の臨時全国宝物調査局のものと、体系的に残されている。こうした文化財の調査を通じて、絵画・彫刻・書蹟・陶磁器・漆器といったジャンルがつくりだされ、時代区分が生み出された。史上はじめて、国家が十等級の美の価値づけをし、これがのちの国宝の基準につながる。

戦前の各府県で発掘された考古学的な遺物は府県から宮内省に届け出ることになっていたため、一八七四年から一九四二年までの『埋蔵物録』一二五冊がある。明治初年の骨董的関心にもとづいた地方からの届け出など、時代時代の考古学の学問的発達が読みとれる。正倉院に関する文書によると、一八八四年の正倉院の宮内省移管には、外交上、外賓への公開をコントロールする意図があったことがわかる。正倉院御物は、「宝物外交」として、明治期以来重要な役割を果たした。秋の曝涼時に拝観した内外の高官たちの名簿も残されている。そのほかフランスのアカデミーにならった帝室技芸員制度（一八九〇年に発足）の選考をめぐる書類がある。あるいは一九四一年の日米開戦以前から計画され、学童、人命よりさきに実行された国宝や御物の疎開の記録もある。すでに宮内省では東京大空襲や敗戦を見通していたような、不気味さである。

これらは日本近代の博物館と文化財、そして天皇制を考える上で、基本的な史料群といえよう。

伊勢神宮の異国人認識

塚本　明

一七七五（安永四）年の五月、琉球の船が志摩国鳥羽浦に漂着した。幕府の指示で薩摩藩の役人が受け取りに赴き、参宮街道を北上してまず大坂の藩邸に向かう。この時、伊勢神宮から神宮領住民に対して「（琉球人の）通行之節、御神領内之火たべさせ申間敷候」との指示が出された。調理する火を同じくしないこの「別火」は、被差別民に対する社会的な差別形態として知られる。琉球は当時清国の冊封体制にも組み込まれた「内なる異国」であり、幕府からは薩摩藩の下に位置付けられた。右の触もその反映であったのか。

伊勢神宮は訪れる参宮客を宮川という川を挟んで迎える。門前町の宇治・山田を含む宮川より内側は、秀吉でさえ検地の棹を入れなかった「守護不入の地」であり、俗権力の及ばぬ「清浄な空間」であった。そしてここでは宮川の外の人間とは同火しないのが原則だったのである。殊更に指示が出されたことの意味は重いが、琉球人が格別な「穢れ」として拒絶された訳ではなかった。

さて幕末開港の情勢下、神宮神官らは「不潔汚穢之醜膚」が神地近辺を徘徊することを恐れ、神宮の領地を含む伊勢の三つの郡と志摩国へは異国人を立ち入らせないようにと朝廷・幕府に願い出た。肉食とキリスト教という異文化と武力侵攻の恐怖からのことであり、念頭におかれたのが欧米人であることは言うまでもない。しかしこの頃から中国や琉球の船に対しても同様に警戒心を強め、「異国人」一般を「不潔汚穢」という表現で収斂させていくようになる。それまでとは明らかに質を異にする「穢れ」意識である。

実は過敏なまでの清浄さを求められた宮川の内側にも被差別民が居住し、神宮の中核域をも徘徊していた。彼らのなかには神宮に年貢を納入する者も居た。そして諸国の被差別民の参宮を、江戸時代の神宮の御師たちは拒絶しなかった。だが幕末になると次第に排除されるようになる。建前とは別に受けいれられていた僧侶も神宮域から逐われていく。外国人・被差別民・仏教が、いわばワンセットで排撃されるのである。明治八年にはイギリス公使パークスが参宮しており、外国人の排除は維新後もずっと続いたわけではないが。

清浄さの「本家本元」とも言える伊勢神宮において、異国人観、「穢れ」観はどのように変容を遂げていったのか。伊勢神宮の明治国家に占める位置に鑑み、近

代社会における他国認識、また穢れ観・差別構造を読み解くひとつの鍵が秘められているように思われる。

（三重大学助教授）

憧れ症候群――文字――

中西幸子

文字に憧れるとはどういうことかともうしますと、私の場合、字を読む、字を書く（ここでは毛筆のこと）、字を読んで解釈する、という三種類のことをいいます。

私が中学生のころ、字を書くということは、とても新鮮なことでした。行書を習うものが必ず手本にするお決まりの蘭亭帖は、法帖の意味が分からないのに、あたかも王羲之に憧れたように毎日書きました。字は、次第に大きいものに憧れ、部屋中、紙を敷き詰めて書いているのを、父が「脚立がいるかね」と冷やかし、そのうちにとうとう「看板屋になるのかね」と言いました。高校時代には草書体に憧れたものの、ふと「やっぱり女の子は美しい仮名文字もすらすらと書きたい」と気がつきました。もうその時、時すでに遅し。私の腕は美しい仮名文字に馴染めないようになっていました。もう努力する事を忘れてしまって、何もかもほってしまいました。憧れの毛筆は成人するまでに終わってしまいました。

ところが、図書館に英文タイプの試験で就職したものの、資料を扱うのにやっぱり文字は大切だったのです。それでまた気持ちが盛り上がり、断念した仮名に挑戦です。でもそれは書くことではなく、「源氏物語」を解読することでした。また、同時進行で仕事に必要ということで、先輩の呼びかけで「漢籍」の講読も始めました。かつて人文研におられた故鈴木隆一氏を先生にして、週一回の勉強会です。私はやっぱり出来が悪く、自分の発表の時、いい加減に「美妾」を「美しい妾（めかけ）」と訳すると、先生はいい加減を許さず、素早くしかしジワーと「中西さん、これは美しい召使いという意味ですわ」と言われて大笑いをしたものの、いつまでも「本当かな……」と、これまた勉強もしないで、日本語から見れば合点のいかないことでした。

私の憧れ症候群はこれでおさまらず、資料との関連もありましたが、今度は古文書を読むことに相成りました。習った先生が「なかなか素質がある」と言った

とかでのぼせ上がり、発掘された文書（しかも、これは生の文書でありますゾ）に触れて、学生さん達と御一緒に解読のお手伝いをさせていただいたことは、とても感動的でした。

研究者でない私は、いつまでも憧れ症候群に酔いしれて、これからも字に触れていきたいと思っています。

（研究所図書室勤務）

書いたもの一覧　二〇〇〇年一月～十二月（氏名五十音順　◉は単行本）

井狩彌介

第二回国際ヴェーダ学ワークショップ　東方学　第九九輯　一月

『国際ヴェーダ学ワークショップ』の周辺　人文　第四七号　三月

The Second International Vedic Workshop: The Vedas and Early Phases of Indian Civilization　*JASAS Newsletter* No.9　九月

Y. Ikari, "Place of Gopitṛyajña Rite of the Vādhūla School"　*Zinbun no.* 34(2)　十二月

池田巧

西暦一九〇〇年に記録されたナムイ語の語彙　東方學報　第七二冊　三月

山の道　言語　第二九巻六号　六月

井波陵一

夢の続き――『紅楼夢』続編の世界　『興膳教授退官記念中国文学論集』汲古書院　三月

王国維と『盛京時報』　東方学報　京都　第七二冊　三月

岩井茂樹

清代の版図順荘法とその周辺　東方学報　京都　第七二冊　三月

嘉靖四十一年浙江厳州府遂安県十八都下一図賦役黄冊残本考　夫馬進編『中国明清地方档案の研究』　京都大学文学部　三月

武進県『実徴堂簿』と田賦徴収機構　夫馬進編『中国明清地方档案の研究』　京都大学文学部　三月

明代『徽州府賦役全書』小考　『98国際徽学学術討論会論文集』　安徽大学出版社　五月

ある宦官の生涯――宦官小徳張略伝　月刊しにか　十一巻十一号　十一月

上野成利

◉人文・社会科学と自然科学の対話の試み――進化論を主題として（阪上孝との共編）　京都大学人文科学研究所共同研究資料叢刊　三号　三月

家族の政治学――フランクフルト社会研究所の『権威と家族』研究をめぐって　人文学報　第八三号　三月

書評・藤野寛『アドルノ／ホルクハイマーの問題圏』　週刊読書人　八月一八日

〈責任〉のポリティクス（学会セッション総括）

社会思想史研究　二四号　九月
猪口・大澤・岡澤・リード・山本編
『政治学事典』　弘文堂　十一月

家父長制

宇佐美齊

L'étude de la littérature française, de Rousseau à Baudelaire, à l'Institut de Recherches en Sciences Humaines de l'Université de Kyoto　*Zinbun* no. 34(1)　三月
花の名前と実在　小原流　挿花　四月
Deux traductions japonaises de《Bonheur》d'Arthur Rimbaud　*Equinoxe* 17/18　五月
座談会・新編中原中也全集をめぐって「中也の脳を探索する」（佐々木幹郎、加藤典洋両氏とともに）　ユリイカ　青土社　六月
翻訳家中也の全貌　季刊 iichiko No. 67　七月
◉新編中原中也全集第三巻「翻訳」（編集・解題・語注執筆）　角川書店　七月
翻訳家としての中原中也　中原中也研究　第五号　八月
シンポジウム・中原中也、近代詩の中の恋愛（中村稔、國生雅子、北川透氏とともに）　中原中也研究　第五号　八月
秋風とともに訪れたヴィヨン　新潮　新潮社　十二月
バルザックの恋文　機　藤原書店　十二月

大浦康介

漱石作品のナラトロジー——写生文の概念をめぐって　人文学報　第八三号　三月
◉哲学を読む——考える愉しみのために（共編著）　人文書院　六月
Figurines chez Sade, *Equinoxe* 17\18（Actes du Colloque franco-japonais 1998）　Rinsen Books　八月

岡村秀典

◉中国古代都市の形成（編著）　科研費成果報告書　三月
◉丹波三ッ塚遺跡Ⅳ（共著）　兵庫県氷上郡市島町　三月
殷代における畜産の変革　東方学報　京都　第七二冊　三月
中国文明の起源『ＮＨＫスペシャル四大文明　中国』　ＮＨＫ出版　八月
◉世界美術大全集　東洋編第1巻　先史・殷・周（共編著）　小学館　九月
儀礼に潜む古墳期の支配構造　朝日新聞（朝刊）　一〇月八日
屈家嶺・石家河文化属城市文明嗎　厳文明・安田喜憲編『稲作、陶器和都市的起源』　文物出版社　十一月

落合弘樹

西南戦争期における京都府警察　人文学報　第八三号　三月
密偵・荘村省三と不平士族佐々木克編『それぞれの明治維新』　吉川弘文館　八月

籠谷直人

◉アジア国際通商秩序と近代日本　名古屋大学出版会　一月
◉産業革命期の経済　『姫路市史　第五巻上　本編　近現代1』（共著）　姫路市教育委員会　三月
近代姫路の自律性を求めて　『姫路市史編さんだより』　姫路市教育委員会　第一二号　三月
International Oreder of Asia in the 1930s（with Shigeru Akita）『「グローバル・ヒストリー」の構築と歴史記述の射程』　大阪外国語大学　三月
1930年代の日本の綿布輸出統制の実態――日本綿糸布印度輸出組合を事例に――　人文学報　第八三号　三月
◉神戸中華会館編　落地生根――神戸華僑與神阪中華会館百年史（編集協力）　研文出版　三月
書評・A. J. H. Latham and Heita Kawakatsu（eds.）, *Japanese Industrialization and the Asian Economy*　社会経済史学　第六五巻六号　三月
1930年代前半のシンガポールにおける華僑通商網――日本綿布取引を事例に――　経済史研究　第四号　四月
経済外交論　中村政則編『近現代日本の新視点――経済史の視点から』　吉川弘文館　十二月

菊地　暁

平成十年度博士論文（課程）要旨〈あえのこと〉のこと――近代日本民俗誌システムの探求――　大阪大学大学院文学研究科紀要　四〇号　三月
世界のかたすみでブンカを叫んだのけもの――あるいは太田好信著『トランスポジションの思想』をめぐる断想――　日本学報　一九号　三月
うどんとモダン――豊中市岡町における都市民俗誌のこころみ――　人文学報　八三号　三月
柳田国男と民俗写真――あるアエノコト写真のアルケオロジー――　日本民俗学　二二四号　十一月

木島史雄

舜典釋文考　東方学報　京都　第七二冊　三月

北垣　徹

De l'idee morale à l'idée-force : la philosophie idéaliste de la Troisième République　*Zinbun* no. 34(1)（1999）三月
◉ゴーシェ『代表制の政治哲学』（共訳）　みすず書房　九月

金　文京

臨刑詩の系譜――黄泉の宿『興膳宏教授退休記念中国学論集』　汲古書院　三月
◉龍谷大学大宮図書館和漢古典籍分類目録――総記・言語・文学之部（共編）　龍谷大学　三月
敦煌変文の文体　東方学報　京都　第七二冊　三月
胡蘭成対台湾文学之影響及其与日本近代文芸思想之関係『文化・認同・社会変遷――戦後五十年台湾文学国際学術研討会論文集』　台湾行政院文化建設委員会　六月

敦煌出土文書から見た唐宋代の賓頭盧信仰　吉川忠夫編『唐代の宗教』　朋友書店　七月
書評・井口淳子『中国北方の口承文化』　東方　二三八号　十二月
従『全唐詩』一首「臨刑詩」談日韓資料在漢学研究上之価値　中華文史論叢　第六四輯　十二月
現代の言葉―日の丸・大統領・読書離れ・キムチとニンジン・義務教育・シュクシュク　京都新聞夕刊

桑山正進

The Kanishka Stupa in the Chinese Texts: Translation and Commentary. 山田明爾編『世界文化と佛教』　永田文昌堂　三月
Historical Notes on Kapisa and Kabul in the Sixth-Eighth Centuries.　*Zinbun* no. 34(1)　五月
◉大唐大慈恩寺三藏法師傳 西域行紀索引叢刊　二（高田時雄共編）　松香堂　六月
漢字情報研究センターの発足に思う　漢字と情報　一　十一月

古勝隆一

『孝経』玄宗注の成立　東方学報　京都　第七二冊　三月
賈大隠の『老子述義』『唐代の宗教』　朋友書店　七月

小林博行

◉人文学の新時代（共編）　人文科学研究所共同研究資料叢刊　二　三月
聞きなしの成立　人文学報　第八三号　三月
一八五九年前後のゲーテ形態学　モルフォロギア　二二　十月

小牧幸代

北インド・ムスリム社会のザート＝ビラーダリー・システム：ムスリム諸集団の序列化と差異化に関する一考察　人文学報　第八三号　三月
サイイド、シャイフ、ムガル、カッサーブ／カサーイー、クレーシー、ダルジー、ムスリム・カースト『世界民族事典』　弘文堂　七月

小南一郎

桃の伝説　東方学報　京都　第七二冊　三月
京師考　岡村科研費報告『中国古代都市の形成』　三月
禹の九鼎　『世界美術大全集　東洋編1』月報　六月
白川先生の学問　平凡社『白川静著作集4』月報　六月
「十王経」をめぐる信仰と儀礼――生七齋から七七齋へ　吉川忠夫編『唐代の宗教』　七月
北白川の夜　藤枝教授追悼文集『藤枝晃』　七月
中国古典文学研究の可能性――民衆文藝への視点　東方学　一〇〇号　九月

小山　哲

近世身分制社会への視点――ポーランドと日本の比較――
Proceedings of Warsaw Symposium on Japanese Studies, 23-26 November 1994, ed. by Agnieszka Kozyra and Romuald Huszcza, Warszawa, 1999.

ヘンリク・ヴァレジィ体験――ヤギェウォ王朝断絶前後のポーランド＝フランス関係――　中山昭吉・松川克彦編『ヨーロッパ史研究の新地平――ポーランドからのまなざし――』　昭和堂　二月

Between Love Letter and Newspaper — The Polish Royal Authority and News Media in the Sixteenth and Seventeenth Centuries　*Zinbun* no. 34(2)　三月

サルマチア――ヨーロッパにおけるポーランドのトポス――　洛北史学　二号　六月

「〔民族篇〕ポーランド」、「〔地域・国家篇〕ポーランド」など四項目　綾部恒雄監修『世界民族辞典』　弘文堂　六月

阪上　孝

啓蒙と旅行記　人文学報　第八三号　三月

◉人文・社会科学と自然科学の対話の試み――進化論を主題として――　（共編）京大人文科学研究所　三月

万国博覧会と科学のイデオロギー　社会思想史研究　二四号　九月

佐々木克

◉志士と官僚　講談社学術文庫（ミネルヴァ書房　一九八四年の再版）　一月

戊辰戦争はなぜ起こったのか　『土佐藩戊辰戦争資料集成』　高知市民図書館　二月

大久保利通の遺書　原田敬一編『幕末・維新を考える』　思文閣出版　三月

戊辰戦争への道　人文学報　第八二号　三月

「倒幕と世直し」「開化政策と民衆」「明治天皇と巡幸」「日清戦争への道」　NHK教育セミナー『歴史でみる日本』　四月

◉それぞれの明治維新（編著）　吉川弘文館　八月

榎本武揚　『それぞれの明治維新』所収　八月

曽布川寛

◉龍門石窟石刻集成（編）東洋学文献センター叢刊第九冊　東洋学文献センター　三月

◉世界美術大全集　東洋編3　三国・南北朝（共編）　小学館　十一月

馬王堆漢墓　月刊しにか　十一巻十二号　十二月

高木博志

近代における神話的古代の創造――畝傍山・神武陵・橿原神宮、三位一体の神武「聖蹟」　人文学報　八三号　三月

明治維新と古代文化の復興　原田敬一編『幕末・維新を考える』　思文閣出版　三月

◉「聖地」大和の形成――近代天皇制と文化（科学研究費補助金研究成果報告）　三月
近代の文化財行政と陵墓――皇霊と皇室財産の形成を論点に　陵墓限定公開二十回記念シンポジウム実行委員会編『日本の古墳と天皇陵』　同成社　五月
岡倉天心と日本古代美術史　佐々木克編『それぞれの明治維新』　吉川弘文館　八月

高階　絵里加

ルーヴル美術館作品解説パネル（翻訳）「十六世紀のフィレンツェ」「パルミジャニーノとその影響」など四点　ルーヴル美術館　四月
◉ルーシー・ミクルスウェイト　たんけんしよう　なぞとき美術館（翻訳）　フレーベル館　十一月
◉異界の海――芳翠・清輝・天心における西洋――　三好企画　十二月

高嶋　航

清代の賦役全書　東方学報　京都　第七二冊　三月
呉県・太湖庁の経造　夫馬進編『中国明清地方档案の研究』　京都大学文学部　三月
科挙の廃止と近代中国社会　古典学の再構築　第八号　十二月

高田時雄

遙かなる雲のかなたへ　Salon　第十一号　一月
◉西域行記索引叢刊Ⅱ大唐大慈恩寺三藏法師傳（共編）　松香堂　二月
Multilingualism in Tun-huang　*Acta Asiatica*　第七十八号　三月
慧皎高僧傳に見える特異な語法について『興膳教授退官記念中國文學論集』　汲古書院　三月
近代粵語の母音推移と表記　東方學報　京都　第七十二冊　三月
中國の漢字の傳統と現在　漢字の潮流　四月
漢字情報研究センターの發足に寄せて　京都新聞朝刊　六月八日
漢字はなぜ「漢字」と呼ばれるのか他五種　月刊しにか　十一巻六号　六月
紹介・『日・中・英　言語文化事典』　月刊言語　二十九巻九号　九月
座談会・大阪弁をめぐって　文学　二〇〇〇年九・十月号　九月
写本から見た敦煌の言語生活（講演要旨）　東洋學報　第八十二巻第二號　九月
東洋言語學の發展と近年の動向　東方學　第百輯　九月
敦煌写本　月刊しにか　十一巻十二号　十二月

瀧井一博

Das Japan-Bild der deutschen Juristen während der Meiji-

Zeit　*Zinbun* no. 34(1)　三月
伊藤博文と国制知　あうろーら　二〇号　七月
〈例会記録〉瀧井一博著『ドイツ国家学と明治国制――シュタイン国家学の軌跡』（ミネルヴァ書房、一九九九年）合評会について　大学史研究通信　第二一号　七月

武田時昌

民間数学者、上野清の遺著　数学の楽しみ　第一七号　一月
祖沖之の数学的業績（1）円周率の算定　東方学報　京都　第七二冊　三月
太極図の発見者――周敦頤橋本高勝編『中国思想の流れ（中）』　晃陽書房　四月
孔子の予言書――緯書の偽作と孔子説話　説話・伝承学　第八号　四月
◉現代語訳『黄帝内経霊枢』下巻（石田秀実、白杉悦雄監訳、佐藤実氏と共訳）　東洋学術出版社　五月
印刷術・ソロバン・羅針盤（特集「中国の大発明」）　月刊しにか　十一巻五号　五月
生を養う古代人の知恵　『日本健康科学学会生涯健康増進分科会シンポジウム抄録集』　九月

田中淡

『營造法式』自序看詳総釈部分校補訳註（上）　東方學報　京都　第七二冊　三月
◉長物志　三（共訳）　東洋文庫　平凡社　三月
中國古代城制における甕城・馬面の出現とその祖形　『中國古代都市の形成』（研究代表者・岡村秀典）　科學研究費研究成果報告書　三月
南宋・金時代の建築　『世界美術大全集　東洋編第六巻　南宋・金』　小学館　四月
作品解説・佛光寺文殊殿／上華厳寺大雄宝殿／崇福寺弥陀殿／雲厳寺飛天藏殿飛天蔵／遼陽白塔／（正定）天寧寺凌霄塔／臨濟寺清塔／（泉州）開元寺鎮國塔・仁壽塔／広惠寺花塔／平遙文廟大成殿／晉祠聖母殿献殿／（蘇州）玄妙観三清殿／（晉城高都）東嶽廟大齊殿／（晉城南村）岱廟大齊殿／（侯馬）董明墓　同右
魏・晋・南北朝時代の建築　『世界美術大全集　東洋編第三巻　三国・南北朝』　小学館　十一月
作品解説・嵩嶽寺塔／旧崇福寺小石塔／雲岡石窟第二窟塔心柱／同第九窟前室東壁浮彫仏殿／炳霊寺石窟一七二窟木造仏帳／麦積山石窟第一二七窟南頂壁画城堡図／天龍山石窟一六窟窟廊／童子寺燃燈塔／仏光寺祖師塔／義慈恵石柱　同右

田中雅一

Sacrifice Lost and Found: Colonial India and Postcolonial Lanka　*Zinbun* no. 34(1)　三月
大東亜共栄圏のインド――戦中の邦語文献におけるカーストと民衆ヒンドゥー教　中生勝美編『植民地人類学の展望』　風響社　八月

インド・タミル　綾部恒雄監修『世界民族事典』　弘文堂　七月
スリランカ・タミル　綾部恒雄監修『世界民族事典』　弘文堂　七月
書評・栗本英世著『未開の戦争、文明の戦争』岩波書店　民博通信　八九号　七月
儀礼的暴力の変容――供犠からジェノサイドへの道程　情況出版編集部編『宗教を読む』　情況出版　八月
割礼　猪口孝他編集『政治学事典』　弘文堂　十一月
儀礼　猪口孝他編集『政治学事典』　弘文堂　十一月
供犠　猪口孝他編集『政治学事典』　弘文堂　十一月
日米軍の宗教生活――チャプレンの調査から　宗教研究　三二三号　十一月

富永茂樹

一七九一年の中間集団――公共空間の社会学のために　社会学評論　第五〇巻第四号　三月
Autour de la liberte de la presse　*Zinbun* no. 34(1)　三月
健康なからだ幻想　樺山紘一編『新・社会人の基礎知識一〇一』　新書館　四月
《非社交的社交性》をめぐって　第五一回関西社会学会大会報告要旨　五月
◉哲学を読む（共編著）　人文書院　六月
◉マルセル・ゴーシェ『代表制の政治哲学』（北垣徹・前川真行と共訳）　みすず書房　九月
第三身分　フランス革命　パリコミューン　猪口孝他編『政治学事典』　弘文堂　十一月
パトリス・ゲニフェー「ジャコバン主義と恐怖政治」解説　みすず　第四七七号　十二月

東郷俊宏

古典を読む、身体を読む、時代を読む　TAO鍼灸療法　第十五号（第四巻一号）　二月
李東垣醫書における「短氣」の意義　東方学報　京都　第七二冊　三月
発言記録・横山俊夫・小林博行編『人文学の新時代――現代自然科学との対話をもとめて――』　京都大学人文科学研究所共同研究資料叢刊第二号　三月
臨床医学における時間の知――中国医学の窓から――　人文　第四七号　三月

冨谷至

晋泰始律令への道――秦漢の律と令　東方学報　京都　第七二冊　三月
解説・『中国文明の歴史　秦漢帝国』　中央公論社　四月
居延漢簡を読み解く　月刊しにか　十一巻九号　九月
宮刑　月刊しにか　十一巻十一号　十一月
秦漢の律と令　日本秦漢史学会会報　第一号　十一月

狭間直樹

五四運動と日本――親日派三高官「罷免」問題をめぐって――　東方学報　京都　第七二冊　三月
座談会・日本人は五四運動をどう捉えてきたか（江田憲治、馮天瑜、緒形康氏とともに）　中国21　第九巻　五月
座談会・東アジアの近代と梁啓超（佐藤慎一、宮村治雄氏とともに）　みすず　第四七〇・四七一号　五・六月
島田虔次先生を偲ぶ　東方学報　第一〇〇輯　九月
孫文と日本のアジア主義『ひょうご講座　神戸と中国――移情閣の復原によせて――』　十一月

藤井正人

◉A Descriptive Catalogue of the Basic Materials of the Jaiminīya Sāmaveda　科学研究費補助金研究成果報告書　三月
A Common Passage on the Supreme Prāṇa in the Three Earliest Upaniṣads (JUB 1, 60-2, 12; BĀU 1, 3; ChU 1, 2)　*Zinbun* no. 34(2) 1999　十二月

船山徹

地論宗と南朝教学　荒牧典俊編『北朝隋唐中国仏教思想史』　法蔵館　二月
カマラシーラの直接知覚論における「意による認識」(mānasa)　哲学研究　第五六九号　三月
梁の僧祐撰『薩婆多師資伝』と唐代仏教　吉川忠夫編『唐代の宗教』　朋友書店　七月
ダルマキールティの六識俱起説　戸崎宏正博士古稀記念論文集『インドの文化と論理』　九州大学出版会　十月

古松崇志

元代河東鹽池神廟碑研究序説　東方学報　京都　第七二冊　三月

前川和也

The Administrative texts of Ur III Lagash of the British Museum (XII).　*Zinbun* no. 34(2) 1999　十二月

真下裕之

16世紀前半北インドの Mughul について　東方学報　京都　第七二冊　三月

水野直樹

戦時強制労働の現場――大江山ニッケル鉱山跡――　グローブ（世界人権問題研究センター）二〇号　一月
書評・琴秉洞著『日本の朝鮮侵略思想』（朝鮮新報社刊）　朝鮮新報（日本語版）　二月十六日
植民地『百科で見る20世紀』（CD-ROM）　日立デジタル平凡社　二月
朝鮮関係コミンテルン文書の概要『ソ連共産党、コミンテルンと日本、朝鮮』　（科学研究費補助金成果報告書）　三月

治安維持法の制定と植民地朝鮮　人文学報　第八三号　三月
大会報告に寄せて　朝鮮史研究会会報　第一三九号　五月
満洲抗日闘争の転換と金日成　思想　第九一二号　六月
韓国学術情報のインターネット検索事始め　コリアン・ドリーム（別冊　本とコンピュータ3）　トランスアート　七月
戦前京都在住の韓国人の生活　民族文化教育研究（京都民族文化教育研究所）　第三号　七月
日本敗戦直後の選挙法改正と「戸籍条項」『横浜の人権づくり』（横浜市職員採用の国籍条項撤廃をめざす連絡会）　九月
朝鮮独立運動、朝鮮労農総同盟『日本歴史大事典』　小学館　九月
「第三国人」の起源と流布についての考察　在日朝鮮人史研究　第三〇号　十月

麥谷邦夫

唐代老子注釈学と仏教　荒牧典俊編『北朝隋唐　仏教思想史』　法蔵館　二月
穀食忌避の思想――辟穀の伝統をめぐって――　東方学報　京都　第七二冊　三月
『太上老君説常清静経』考――杜光庭注との関連で――　吉川忠夫編『唐代の宗教』　朋友書店　七月

森時彦

生計学と経済学の間　東方学報　京都　第七二冊　三月
中国学のパイロットセンター　漢字と情報　第一号　十月

守岡知彦

UTF-2000――汎用文字符号に依存しない文字表現系の展望全国文献・情報センター人文社会科学学術セミナーシリーズ　第十号［アジア情報学のフロンティア］　十一月

森賀一恵

ト辞の法表現　東方学報　京都　第七二冊　三月

森本淳生

Entre *Agathe* et le *Mémoire sur l'attention*—Essai sur l'imaginaire valéryen—, *Etudes de langue et littérature françaises*, no. 76, Société japonaise de langue et littérature françaises　三月
ポール・ヴァレリーと表象＝代理の「危機」　人文学報　第八三号　三月

矢木毅

高麗国初の広評省と内議省　東方学報　京都　第七二冊　三月
高麗時代の銓選と告身　東洋史研究　第五九巻二号　九月

安岡孝一

3bit Compaction と冗長2進を用いたFPGA向き乗算器（共著）　電子情報通信学会技術報告VLD99-87　一月
分散メモリ型ベクトル並列計算機上での高速ソーティングアルゴリズム（共著）
情報処理学会研究報告　2000-HPC-80-6　一月
JIS X 0212とJIS X 0213（共著）
京都大学大型計算機センター第六四回研究セミナー報告　三月
冗長2進を用いたFPGA向き乗算器（共著）
京都大学大型計算機センター研究開発部研究発表報告集　第十五号　三月
VPP800向き高速ソーティングアルゴリズムの開発（共著）
京都大学大型計算機センター研究開発部研究発表報告集　第十五号　三月
SPMD並列実行方式を導入したデータ並列化Fortran言語yaHPF（共著）
京都大学大型計算機センター研究開発部研究発表報告集　第十五号　三月
JIS X 0213の符号化表現
人文学と情報処理　第二六号　四月
The Fastest Multiplier on FPGAs with Redundant Binary Representation（共著）
Proceedings of 10th International Conference FPL 2000　八月
漢字情報とは何か
漢字と情報　第一号　十月
外字と異体字　全国文献・情報センター人文社会科学学術情報セミナーシリーズ
第十号「アジア情報学のフロンティア」　十一月

安田敏朗

満洲農業文献目録（予備版）共編：井村哲郎
近現代東北アジア地域史研究会ニューズレター　十一号
一九九九年十二月
「言語政策」の発生――言語問題認識の系譜――
人文学報　第八三号　三月
「標準語」を脱することは可能か　真田信治『脱・標準語の時代』
小学館文庫への解説　五月
「英語第二公用語論」におもう　創文　四二〇号　五月
書評・岡本雅享『中国の少数民族教育と言語政策』
中国研究月報　五四巻五号　五月
◉近代日本言語史再考――帝国化する「日本語」と「言語問題」――
三元社　九月
帝国日本の言語編制――植民地期朝鮮・「満洲国」・「大東亜共栄圏」――　三浦信孝・糟谷啓介編　言語帝国主義とは何か
藤原書店　九月
国語
政治学事典　弘文堂　十一月

山室信一

松山巌と対談「世紀末の一年」
一冊の本　第五巻一号　一月

書評・イマニュエル・ウォーラーステイン著『ユートピスティクス』　朝日新聞　一月十六日
書評・金大中アジア太平洋平和財団著『金大中　平和統一論』　朝日新聞　二月十三日
書評・山崎正和著『歴史の真実と政治の正義』　朝日新聞　三月十二日
シベリアが生んだ逆説　朝日新聞　三月十九日
書評・萩原延寿著『遠い崖・一―八巻』　朝日新聞　三月二六日
井上毅他　政治学事典　弘文堂　十一月
Form and Function of the Meiji State in Modern East Asia　*Zinbun* no. 34(1)　三月
夢のありか　一冊の本　第五巻六号　六月

山本有造

書評・「一九四〇年体制」は金日成によって完成された、か？――木村光彦『北朝鮮の経済』を読んで――　創文　四一七号　一月
植民地統治における「同化主義」の構造――山中モデルの批判的検討――　人文学報　第八三号　三月
◉国際金本位制と大英帝国――1890―1914年――（翻訳）　三嶺書房　九月

横山俊夫

未来への一歩、日本人は何処へゆく／九（談）　京都新聞　一月十日
Culture of Japan: Japanese Love of Bath, *Sumitomo Quarterly*, winter 1999/ 2000, No. 79　（監修・校訂）　一月
平成十一年度関西在住外国人に関する調査研究報告書（栗田靖之・別府春海両氏と共編）　関西インターメディア株式会社　二月
◉人文学の新時代――現代自然科学との対話を求めて（人文研七〇周年記念国際シンポジウム）（共編著）　京都大学人文科学研究所共同研究資料叢刊　第二号　三月
◉安定社会の総合研究――安定社会をみる・かたる／ことばをめぐって――　第十回京都国際セミナー（最終回）報告書（共編著）　財団法人京都ゼミナールハウス　三月
言葉のあいまの力　けいはんなマラソンセミナー「人間・生物・時間」第十三回研究会記録所収　株式会社けいはんな　三月
◉〝間〟その魔法の時空――けいはんなマラソンセミナー「人間・生物・時間」が贈る実感のひととき――（勝川保氏、沢尾俊和氏と共編）　株式会社けいはんな　三月
IN QUEST OF CIVILITY: Conspicuous Uses of Household Encyclopedias in Nineteenth-Century Japan　*Zinbun* No. 34　三月
無言をめぐって「安定社会と言語」班　人文　四七号　三月
Culture of Japan: Japanese Pickles: enticing color, taste and aroma, *Sumitomo Quarterly*, spring, 2000 No. 80

（監修・校訂）四月
京都新聞　四月十九日
とぅんばらー通信　第十三号　科学研究費補助金・基盤研究（A）（1）「前近代久米島文化の復元」（編集）
京都大学人文科学研究所横山研究室　五月
礼儀作法学校としての日本　川勝平太編『「鎖国」をひらく』所収
同文舘出版　六月
マイケル・ローウィ「藤枝晃先生追悼」（翻訳）藤枝晃先生追悼文集所収
自然文化研究会　六月
Culture of Japan: Playing the Japanese Way: *Shogi*, *Sumitomo Quarterly*, summer 2000, No. 81
（監修・校訂）七月
とぅんばらー通信　第十四号　科学研究費補助金・基盤研究（A）（1）「前近代久米島文化の復元」（編集）
京都大学人文科学研究所横山研究室　七月
とぅんばらー通信　第十五号　福建特集　科学研究費補助金基盤研究（A）（1）「前近代久米島文化の復元」（編集）
京都大学人文科学研究所横山研究室　七月
私の提言／天地人三才のあや　盛和スカラーズソサエティ会報　第四号　稲盛財団　八月
Culture of Japan: The Spirit of the Samurai: *Kendo*, *Sumitomo Quarterly*, autumn 2000, No. 82
（監修・校訂）十月
とぅんばらー通信　第十六号　科学研究費補助金・基盤研究（A）（1）「前近代久米島文化の復元」（編集）
京都大学人文科学研究所横山研究室　十月
世界遺産と時　二〇〇一年世界遺産カレンダー・木田安彦ガラス絵の世界（共同企画、前文、図版解説）
松下電工株式会社　十二月
とぅんばらー通信　第十七号科学研究費補助金・基盤研究（A）（1）「前近代久米島文化の復元」（編集）
京都大学人文科学研究所横山研究室　十二月
新世紀は熱き風流、文明への仕掛け（岩井彩氏と対談）
京都新聞　第二集　十二月十五日
天地往来の人（日本橋三越本店「NHK衛星放送やきもの探訪展」図録、深見陶治氏作品解説）
NHKプロモーション　十二月

◉言語力の諸相――試行的共同研究報告――（編著）
京都大学人文科学研究所共同研究資料叢刊　第四号　十二月

人文
第四八号
二〇〇一年三月三一日
京都大学人文科学研究所発行
共同印刷工業
非売品